517
432

佛諧三十六家選

桃李菴編

帝國圖書館藏

俳諧二十六家選

桃李庵編

東京
文光堂藏版

大正
15. 10. 12
内交

517-432

はしがき

此の篇題して俳諧三十六家選といふ、別に深意のあるありてにはあらじ、たゞ好める道とて、見るに隨ひ、聞くに任せて、書きあつめたるもの、更に校訂して此に出せしのみ、もとより其の順序のごとき、故意ありて並べたるにはあらず、たゞ筆にまかせて綴りしのみなり、且此篇は三十六家選と題するも、彼の俳諧中興の祖と稱へらるゝ芭蕉菴桃青翁の集は曩に予が編せし芭蕉翁一代集なるものありて、別に一冊を成したれば、再び此に出すの要なければ、そは省きつ、見る人咎むることなくんば幸なり。

桃李菴主しるす

俳諧三十六家選目次

○松永貞徳……一
御傘序……一
山本西武に贈る文……三
俳句……四
○荒木田守武……五
千句跋……五
俳句……六
○安原貞室……七
枕の記……七
俳句……八
○山崎宗鑑……九
俳句……九
○北村季吟……一〇
硯賦……一〇
俳句……一二
○寶井其角……一三
嘲佛骨表……一三
芭蕉翁終焉記……一四
蚊柱自賛……一八
猿蓑序……一九
文浣に贈りし書翰……二〇
俳句……二二
○服部嵐雪……二二
胡塞記……二二
其袋自序……二四
虱をとる辯……二四
簑虫をきゝにゆく辭……二六
裝遊稿……二七
俳句……四七
○向井去來……五一

鉢叩辭……五一
後鷹山賦……五四
落柿舍記……五五
蠶虫傳……五六
六玉川後贊……五七
鼠賦……五八
落柿舍の壁書……六一
丈草誄……六一
俳句……六四
○西山宗因……六九
向榮菴記……六九
俳句……七〇
○内藤丈草……七一
芳野賦……七一
詩歌俳諧辯……七三
贈新道心辭……七六
六玉川前贊……七六
盃銘……七七
俳句……七七
○森川許六……八一
百花譜……八一
紫芝岡贊……九一
風俗文選自序……九一
飲食色欲箴……九三
蕎麥論……一〇〇
旅論……一〇三
琵琶亭記……一〇四
直指傳……一〇五
瓢賦……一〇九
長雪隱解……一一一
智月尼に贈りし書翰……一一三
五老井記……一一三
西銘……一一五
斷絃文……一一五

是非齋銘……一一九
豆腐辯……一一九
人參辯……一二〇
雨乞表……一二四
俳句……一二五
○上島鬼貫……一二九
俳句……一二九
○平野杉風……一三六
俳句……一三六
○各務支考……一四一
四郎五郎傳……一四一
牧童傳……一四三
獅子菴記……一四六
論師說……一四八
祭猫文……一四九
東銘……一五一
宴柳後園序……一五一
箸箱銘……一五三
博學論……一五四
自造終焉記……一五六
前鷹山賦……一五七
示秋之坊辭……一六〇
百鳥譜……一六一
俳句……一七〇
○惟然……一七四
貧贊……一七四
俳句……一七五
○谷口蕪村……一八一
桃李集序……一八一
俳句……一八一
○立花北枝……一八八
俳句……一八八
○小西來山……一八九
女人形記……一九〇

俳句……一九一
◎池西言水……一九二
俳句……一九二
○志太野坡……一九四
蕃椒序……一九四
俳句……一九六
○野々口立圃……一九九
花桶銘……一九九
俳句……一九九
○横井也有……二〇〇
蓼花巷記……二〇〇
七景記……二〇一
熱海紀行……二〇五
隅田川涼賦……二一二
四藝賦……二一四
旅賦……二一七
百魚譜……二二二
百虫譜……二二七
煙草說……二三二
戀說……二三四
乞食畫贊……二三九
蝸牛齊頌……二四〇
若菜賓序……二四〇
妖物論……二四一
斷酒辯……二四一
借物の辯……二四二
手水鉢銘……二四五
臍の頌……二四七
晋路に與ふる辭……二四八
鬼傳……二五〇
長短解……二五一
鼻箴……二五三
賀某剃髮文……二五四
俳席之捉……二五四

贈或人書……二五六
俳句……二六〇
○中川乙由……二六三
俳句……二六三
○久村曉臺……二六五
俳句……二六六
○高桑闌更……二六九
俳句……二六九
○河合曾良……二七二
俳句……二七二
○成田蒼虬……二七四
俳句……二七四
○越智越人……二七七
俳句……二七七
○李由……二七九
疝氣傳……二七九
俳諧頌……二八一
南行紀……二八二
風俗文選序……二八六
示僧古鏡辭……二八七
聖靈祭文……二八八
俳句……二九〇
○加舍白雄……二九二
俳句……二九二
○大島蓼太……二九四
嵐雪文集序……二九四
俳句……二九四
○松倉嵐蘭……二九七
富士賦……二九七
燒蚊辭……二九九
俳句……三〇一
○岩田涼菟……三〇二
神農畫贊……三〇二
俳句……三〇三

○園女……三〇四
雲虎和尚に答ふ……三〇五
俳句……三〇五
○千代女……三〇七
俳句……三〇七

俳諧三十六家選目次終

俳諧三十六家選

桃李庵主人編

○松永貞徳

幼名勝熊、延陀丸又長頭丸といへり、後吉右衛門と改む號を逍遥軒といふ、元和二年に生れ、承應二年十二月十五日歿す、年八十三、京都島羽實相寺に葬る。

●御傘序

俳諧は、面白事あるとき、興に乘じていひ出し、人をもよろこばし、われもたのしむ道なれば、おさなれる世の聲とは、是をいふべきなり、しかるを、山崎宗鑑、犬筑波を撰しより、連歌を貴み、俳諧をばいやしき道と思へり、宗鑑が心は、さにはあらず、そのかみ二條殿の筑波集、宗祇法師新筑波をあがめ、我が身を卑下して付たる名なり、筑波とは、連歌のことなり、大參犬神人のやうに俳諧を、犬連歌といふ義にあらず、抑もはじめは、俳諧と連歌のわいためなし、その中よりやさしき詞のみをつゝけて

連歌といひ、俗言を嫌はず作する句を俳諧といふなり、俳諧といふ文字は唐の文より出でたり、長歌、短歌、旋歌、混本俳諧等は、歌の一體の名あり、犬なんぞたとふることを、紀貫之、古今の部立に入れ給ふべき、其後の集にはわくらはにはあれども、みだりかはしきかはりには、深くかくれて、其沙汰なしと聖代を待えて、たれとゞむるともなけれども、京、田舎の、高も、いやしきも、老たるも、若きも、此道といへば、耳をそばだてゝ心をよろこばしむ、しかれどもさしあひにまぎふこと多くて、諍論絶えせねば、丸が門弟のために、此一帖をあらはすを、位と徳とそなはらざるものは、かやうの書はえらばぬ事なるに、くさきのくさき事と、梅の木のとがむる人もあるべけれど、これは應安の新式を立て、一座一句のものをば二句にさだめ、七句のものをば、五句になすやうの事のみにて、わたくしの新法を一つもいださず、誰も知りたる和漢のごとく、あいはからふものなり、之を此まゝ置侍らば、はらくろなる人有て、俳諧の新式なんぞ申事もや侍らん、似合たる名を付ばやとおもひめくる次に、心にかゝふ處なし、たゞそなた次第と、外

題にからむといへば、かたへの小性すゝみていはく、それは氣にもなからざり、さらひのことにあたらねば、あまりにおほそうにや候べき、丸が曰、けふもひろくたよりとてろもなし、海つけよと申せば、各盞とかめんゝさかづきとりありたしと申所に、それよりもとしおとりの、今一人の小性、そのちいさきさかづきよりは、うへさまのおからかさと申度と申、うの心はいかにとゝへば、此一本のあるならば、あめが下にさしあひする人、又とあるまじくと申、いづれも丸がつけたる名よりはまさりたり、このうへはやく神慮にまかすべきとて、花咲の宿の、稲荷のぼこらの見くじをとれとはからひければ、おさなき子のいふことを、神も納受やし給へけん、おからかさと云ふ、一闔おりさせ給へり、御の字さへあるならは、上のおからがさと云ふことはしらるべし、されば文字すくなにて、きゝもれば、御傘をこゝろにとゝまりて、御さんとなづけ待るものなり。

◎山本西武に贈る文

俳諧批點の儀懇望ゆゑ、即ち免許申候、批點の次、人丸圖像一幅遣し申候、會の時に掛可

給候、遺物に殘置申候、頓首。

霜月朔日

西武殿へ

長頭丸判

皆ひとのひるねの種や秋の月
甜らせてやしなひたてよ花の雨
冬ごもり虫螻までも穴かしこ
朝鷹や出るもゝどるもふくらかり
花見せんいざやあみだの光り堂
草も木もめでたさうなりけさの春
めり〳〵と落葉は何をかみな月
あとふらでやしなひ立てよ花の雨
月やならぬわが身ひとつのかけ法師
雪月花一度に見する卯月かな
櫻鯛にこはまさりけり紅葉鮒
むつきてふ最初いづれのおほん時
信あればこれも飛梅のきとくかな
しほるゝは何か杏の花のいろ
初寅の泥障てまいれ鞍馬寺
蚤蚊をも殺さでころせわがこゝろ

秋の野を手にさげてゆく虫籠かな
鳳凰も出よのどけし酉のとし
雪打は夏にせばやの遊びかな
かりがねは秋風樂のことちかな
鬼は外ふくはは風としの内
よめからば見とりにせばや柳髪
つかぬ鐘にひゃくほどふるしもく哉
若水の得ざるも汲て惠方かな

○荒木田守武

守武は園田長官中川平太夫といひ、伊勢内宮の神官なり、大永中童子教訓の爲にとて一夜百首を作る、之を世の中百首と稱し、又伊勢論語と云ふ、文明五年に生れ、天文十八年八月八日歿す、年七十七。

●千句跋

さて俳諧とて、みだりにし笑はせんとばかりはいかむ、花實をそなへ風流にして、しかも一句たゞしく、さてをかしくもあらんやうにと、世々の好士のをしへなり、此の千句は、それをもとちめず、とくみたしたき初念ばかりに、春秋を二句をむすびたるところもあるべし、されども正風は、誰人の耳にもいるまじきに、聊かもきこえんは、はからざる幸ならんか、其の上粉骨の妙句おきにしもあらず、又さし合も時によるべきにや、

しひて直さんも執心いかゞなり、然るに、俳諧は何にてもなきわとなしこと、、好ざる
かたの言程あれど、何かまた世の中それならざらんや、本より連歌に、露かはらざる大
事ならんか、さるを兼戴の好にて、心ものび他念なきとて、長座には必ずもよはし、庭鳥
がうつほになると夢を見せ、むこ入に一はしをわたり、宗碩は、文かよはしの自讃に、入
相の鐘を腰にさし、宗鑑より度々發句などくだし侍り、近くは宗牧の一二座も忘れがた
く、それらをたよりて、思ひよる事しかなり。

鶯のむすめかなりぬほと、ぎす
鶯のすてごならおけほと、ぎす
御座敷を見ればいづれも神無月
散る花を南無阿彌陀佛とゆふべ哉
青柳の眉かく岸のひたいかな
飛梅やかろ〳〵しくも神の音
元朝や神代のことも思はる、
撫子や夏野の原のおとし種
落花枝にかへると見れば胡蝶かな
勢子の子も來べき霜なりとまる狩

散る音は花もおよばぬ木の葉かな
朝顔にけふは見ゆらん浮世かな
越方も又行末も神路山峯の松風峯の松風
梅そめはこぬ春まねて袂かな
錦かとあざめにはとき小萩かな

○安原貞室

名は正章、通稱彦右衛門、一農軒と號す、慶長五年生れ延寶九年二月七日歿す、年六十有、京都鳥羽實相寺に葬る、俳諧は貞室の門人なり。

●枕の記

敷妙の枕は、床臺の臥具にして、老少男女のねをやすからしめ、勞をたすけ、閑をそふる寶器なれど、人つねに目なれて此の德の本意をしらず、もろこしの人も是をいみじと思へるにや、香木をもてけだもの、形をきざみ、玉をみがき玳瑁をのべて、あしき夢をもさき侍る、此の國の歌人のよみ置はべりしも猶こちたし、されば我枕は、是等の品にはあらで、みづから老のするに、二つ枕をもとめて、座の左右にしては愛することあり、一つは桑の木の圓枕なれば、その形によせてお玉と名づけ、今一つは滑なる方石なれ

ば、やがてお岩と云ふ、むかし近くめしまつはせし少女の、それが名をかれるものなり、玉といひしはひつ〳〵とこえて、膚のすべらかなりしかば、おさおき頃より傍にふさせ侍りし新手枕も忘れがたし、岩は夜な〳〵あとさゝせつるに、踵のあらはしとて、あかゝりのひつかしかりければ、おもひなぐらへていふおるべし、宋司馬文公が圓枕は學窓にまろばし、長き眠のさめ易くして、讀書にたゆみなからしめむが爲めに、孫楚が流を枕せしも、耳を洗はんが爲めとかや、下官が愛するはさる心にあらて、桑は中風をふせぎ石は、頭熟をさまさむとなり、唯よく生をやしなふ便あれば、豈にいたづらふしといはんや、或日ひとりの友來りて、此の二枕をあやしみて、猿のつふりやもたりけむと笑ふに、此の記を書きて其の人に答ふるのみ。

むらさきや燒野を消してすみれ草
是は〳〵とばかり花の吉野山

いざのぼれ嵯峨の鰐くひに都鳥
跡の月はみよしの雲や富士の雪

借錢の淵はうづまぬ氷かな
涼しさのかたまりなれや夜半の月
虫の音をもらひなきする夕かゝ
猶あはれ撰のこされし虫の聲
月影やかたけて通るかさの雪
老の齒のけふもとけしお氷もち

○山崎宗鑑

宗鑑は近江の人、俗稱を支那彌三郎範重と云ふ、足利氏の臣なり、後致仕して山崎に住す、因て氏とす、寛正四年生れ、天文二十一年歿す、年八十有九。

いやめなる子供産おけはとゝぎす
筆ひちてひすびし文字の吉書かな
摺小木にしらるな蓼の花さかり
天神ぞ梅にましたる花もなし
うたがふお今日の雨やま杜宇
松かげや月は三五夜中納言
鶯や國栖の翁の笛のでし
春雨や花まつ人の心しり
けふといふ興をさますや月の雨
抱て寢ても肌はゆるさぬ火桶かお
手をついて歌申しあぐる蛙かな
傘を着ば雨にも出よ仲半の月
氷皆氷魚と化す夜か水の色
月に柄をさしたらばよき團扇哉

元朝の見るものにせん富士の山　花の香をぬすみてはしる嵐かな
雖柿はおのが手そめかむらもみぢ　聲なくば鶯こそ雪の一つくね
若々しいつまであらしふきのたう
宗鑑はどこへと人のとふあらばちと用ありてあの世へといへ
切たくもあり切たくもなし（或人の前句）
盗人をとらへて見れば我子なり（前句に對して以下三句を付けたり）
心よき的矢のすこし長いをば
さやかなる月をかくせる花の枝

○北村季吟

名は信澄、通称久助、季吟は其の號なり、又拾穂軒、湖月齋、七松子等の別號あり、近江北村の人、寛永二年六月十五日江戸に歿す、下谷池の端正慶寺に葬る。

◎硯賦

物を玩びてその志を喪ふはさかしき人の誡ながら、それも文房の友がきなれば、また求めずしもあるべからず、あら玉の年のあしたより、筆試むる韻のはじめにも、その靜なるものは、命長しと打見るも、いとのどかならぬや、五月雨のつれ〴〵なる空も、墨より流す夕つ方など、何となく打向ひつゝ、人知れぬ思をものべあまし、文月の比の手向草にも、梶の下葉をかさねて、ふてつむしの夜さむの色に、壁の中をも寫してむ、さるはひじりの道を味ひ、人の世の常のゝりをも知りぬ、雪をあつむる窓の前に、氷をくだく深き夜など、此の身は衾にまつはれて、動きすべくもあらぬに、やつこもおこされてはつぶやきなむ、そのことわりも知られてせむ方なきに、誰か斯く共に、語らふ老のすさめとはなりぬべき、かくて起きぬる曉の空に、獨りおしまづきによりてつら〴〵思へば、等しき人も稀なる世に、たとへなべての人ならで、かうやうのともなひぬべき、そのたぐひあまたなる中に、琴は心をすませども、彈く人愁ありといひ、猶は愁を忘るといへど、心を亂るも亦つゝまじ、月を見れば心づくしに、花はかつ散りやすし、白氏が風姿を知らざれば、竹もいかでか我が友ならん、王氏が逍遙ならずんば、鳥をも友となしがたし、さらば我が趣のあいよりて、朝な夕なに親むべくは、やよいさはき人もうるはし

みせよ。

かへせ〳〵亥の年あらば年の暮
冥加あれな宿にあやめをふき自在
鶯の和歌三神や月日星
夏痩とこたへて跡は涙かな
年の内へふみこむ春の日わし哉
獣はほゆる貌なりねはん像
まさ〳〵といますがごとし魂まつり
手折るれば里ふんおれや美人草
一僕とぼく〳〵ありく花見かな
日の本やたうとしはやす左義長
女郎花たとはいわはの内侍かな
おれにいはしや先御代をこそ千々の春
鳥籠のうきめ見つらんほとゝぎす
腹筋をよりてや笑ふいと櫻
初夢や寝言にもいふ君は千代
秋風の口真似するや荻の音
此時を空さめ〳〵とつゆしぐれ
地主からは木の間の花の都かな
いや見せに富士を見た目に比枝の雪
腹にけさはへるとみしか門の松

腹筋をよりてやわらふ糸ざくら
山の景や一兒さくらにほのうみ

○寶井其角

幼名を源助と云ふ、長じて順哲と稱す、初め母方の氏を冒して榎本といひしが、後寶井と改む、寛文元年江戸に生れ、寶永四年二月晦日歿す、年四十七、芝三本榎上行寺に葬る、六合堂、天狗菴、善哉菴、狂雷堂、晋子、寶晋齋等の別號あり

●佛骨表を嘲る

すきものはさくをあやかれ梅の花
富士の山師走ともなる姿かな

ひかし韓退之、表を奉つて佛骨を嘲る、我れ今これを讀みて退之を嘲る、人死して骨となり、骨朽ちて土とかはる、佛骨何の王位をけがさむ、佛骨もし人を穢さば、禽獸の皮骨は、猶人をけがすべし、人は天地の靈にして、禽獸人におよばず、それ束帶のかざりには、象牙をたふとび、珍簞の鋪物には、虎豹の皮にふす、鼈甲は笄につくり、尾毛は筆の用にぬかる、鹿茸牛角鯨の髭のたぐひ、宮室を飾り器物をつくる、たゝき醢は、なめて口中を潤し、雉子の胴殼蕪骨は、嚙んで直に腹中に走る、退之、佛骨をいやしとし、禽獸

をたふとしとするは、何の謂ぞや、そも佛骨細工のたすけにもならずといはゞ、はやく疾鬼に與へて金錢とせざる、たとひ拂底の鬼なりとも、虎の革の特鼻褌は取るべしと、かれが淺見を嘲つてしかいふのみ。

しばらくは蠅を打けり韓退之

●芭蕉翁終焉記

抑もこの翁は、その身貧窮なりといへども、その徳の風雅にとめるや、二千餘人の門葉ありて、夷洛ひとへに合信する、因と縁との不可思議なる、いかにとも勘破しがたし、されば天和の頃ならんか、武江の草菴に火急の難にかこまれ、潮にひたる苦をかつぎて、煙の中に生のびけむ、是れ〻玉の緒のはかなきはじめなるや、爰に猶如火宅の度をさとり、應無所住の心をはなちて、其の次のとしは、甲斐の山里に身をかくし、富士の雪のみつれなければや、三更月下入無何といひけむ、なにがしのあともなつかしかれば、その人々はうれしくて、燒原の舊草に菴をむすび、しばし心をとゝむべき便にと、一株の芭蕉を植置て、たらひに雨をきく夜とは、その世にそのときの吟なれば、人はおのづから芭蕉の翁ともよぶならし、その頃に圓覺寺の大巓和尚とかや、易に精しくはしけるに、ある時この翁の本卦を見て、萃といふ卦にあたれるよし、是は一もと薄の風に吹かれ雨にしほれて、うき事の數のみしげけれと命つれなく、からうして世にあるさまにたとへたり、されどもその字をあつまるとよみて、その身はひろかならんとすれども、かゝたこなたに事つどひて、心をやすんずるとき、おしとゞ、誠や聖典の語に感じてかの草菴に入來る人々の、道を慕ひ風雅を學びずといふものなし、かくて貞享のはじめの秋は、大和地や吉野の奥までもたづね行き、心のくさをのこさず、とく〳〵の水に袂をしぼりて、是より人の見ふれたる茶の十徳にひのき笠、いかめしきあられに風狂し、身を竹寂の風に吟行して、その名の東西にひゞくより、永く蕉風の師とゞ仰ぎける、禪はもとより佛頂和尚に嗣法して、ひとり開禪の法師といはれ、一氣鐵鑄生といへる勢あがら、老身もやゝくつはるゝまゝ、句ごとのからびたる姿まで、自然と山家集の骨髓

を得られたる、誠は我道の杜子美にして貧交やゝ人にあつく、宗鑑が洒落も、をしへの一かたなぁうん、むかしは象潟に能因あり、木曾路に兼好あり、二見に西行も、高野に寂蓮も、越のたよりは宗祇宗長、白川には兼戴の草庵ありて、いづれもこの邊の古人ながら、我翁のまぼろしにつきて、いざやいざやとさそはれけむ、行衛の空もたのもしくや、慈鎮和尚の旅の世に、また旅寢してとよみ給へるも、是等の境界に思ひ合せて、四たび結びて四たび住捨し、深川の名殘も此限なるや、ことしは伊賀の古里にかくれて、しばしの閑素をうかゞひ給ふに、さは心ある人に見せばやと、津の國なる人に招かれて、そこにも冬籠のたよりあらばと、せちに思立たまへるも、例に道祖神のすゝめなるべし、さるは長月の晦日の程より、泄痢の勞にたゝれふして物いふ力なく、手足もこほりぬるまゝに、あはやとあつまる人々の中にも、去來、丈草は洛より來り、乙州木節は大津より來る、膳所の正秀も、平田の李由も、支考惟然はもとよりそこにありて、おの〳〵針藥の供給をつくし、父につかふるはその子にもまさり、子にをしふるはその父にもす

ぐれたらん、かくても木節が藥になむ、死期までの唇をうるはしてむと、その後は人にもあはずなりぬ、されば其角は、ある人にさそはれて、和泉の談輪といふ所より、吹井の舟の浦づたひして、十一日のゆふべ難波につきて、まづは翁の行衛たづね侍るに、かくなやみふしおはすといへば、思ひがけす胸つぶれて、その病床にうかゞひより、此はどの覺束あさをのぶるに、力なき聲の詞をかはすのみなり、今は年比の心ざしもかよひ、住吉の神のひき立給ふにやと、且うれしく且かなし、さて十二日の申の時ばかり、死顏うるはしく眠れるを期として、此世のいきもたへはてぬらん、人々おきれたるばかりにこそ、其夜ひそかに長櫃におさめ、商人の用意にまぎらはして、川舟にかき乘するに、具しけるもの十人あまり、笘もる雫に袖さむみ、旅寢こそあれ〳〵とためしなき奇緣をつぶやき、稱名も觀法ひとり〳〵の心にして、年ごろ日ごろのたのもしき言の葉むつまじき敎をかたみにて、俳諧のひかりをも失ひ、なき人の名のみ慕ふべき、きのふを今日のひかし物語とはなりぬ、もしや松島のまつ便も遠く、越のしらぬの知らぬはてし

にて、かくわぢきなきことわらば、聞ておぞろくばかりならんに、一夜もそひてなきがらの風を厭ふは、此人々のはかならぬかは、此期にわはぬ門人のなげき、これより思ひやるもいくばくぞや、さてしも烏にさめ鐘をかずへて、伏見は明ぼの丶霧のまぎれより、湖南の義仲寺に棺を移して、近里遠境の名を傳ふる人は、招かざるに馳せ來りて、およそ三百餘人なるべし、墓は木曾殿の塚にとなりて、おのづから古びたる柳もあれば、かねて終焉のちぎりなるやと、そこに野面の無縁塔をまねび、あら垣をしわたし、冬枯の芭蕉を植ゑて、その名の紀念とはなせりけり、げにも所は長良山や、音羽の峰も近ければ、鴉のさ丶波も爰によせて、漕ゆく舟も觀念のたよりならずや、樵路の鹿、田家の鶴、すべて湖上の月に映じて、この廟前の風景となれば、還骨も長く此の地に清からん、さらば其境もはるかに其程もとほく、風のたよりに我翁を慕はん人は、こ丶に此記をもて回向の便とすべし。

●蚊柱自賛

蚊ばしらに夢のうきはしかゝるなり

むかし定家卿の浮橋は、過去よりも現在にかゝれり、この未來をとりて夢境に入る、これみづから無究のさかひを知るなるべし。

●猿簑序

俳諧の集つくること、古今にわたりて、此道のおもて起すべき時なれや、幻術の第一として、其句に魂のいらざれば、夢に夢見るに似たるべし、久しく世にとゞまり、長く人にうつりて、不變の變を知らしむ、五德はいふに及ばず、心をこらすべきにしなみあり、彼西行上人の、骨にて人をつくりたて丶、聲はわれたる笛を吹くやうになむ侍ると、申されける人には成て侍れども、五の聲のわかれざるは、反魂の法のおろそかに侍るにやされば、たましひの入たらば、アイウエオよくひゞきて、いかならん吟聲も出ぬべし、たゞ俳諧に魂の入たらんにこそとて、我翁行脚のころ、伊賀越しける山中にて、猿に小簑をきせて、俳諧の神を入れ給ひければ、たちまち斷腸のおもひを叫びけむ、あだに懼

るべき幻術なり、これをもとゝして、此集をつくりたて、猿簑とは名づけ申されける、これが序も其心をとりて魂をあはせて、去來凡兆のはしげなるにまかせて序す。

●文浣に贈りし書牘

歳暮之爲御壽、如例年遠來之處、酒料壹封、蕗鹽漬一桶被贈下、御厚志の段幾久敷致受納候、御序御家内はじめ御社中にも、宜しく御傳可被下候、しかれば去十四日、本所於都文公、年忘之一興御催し有之、嵐雪、杉風我等も出席にて、折から雪面白く降出し、風情手にとるが如く、庭中之松杉は雪をいだゞき、雲間の月は晴を照し、風興今は難捨と、夜いたく更行くまゝも、はや丑三つの頃に成行、犬さへ吠えずうちしづまり、文臺料紙もおしかた寄、四五人あつまりて蒲團をかつぎ、夢の浮世といふ間もあらせず、けはしく門をたゝくものあり、玄關に案内し、我等は淺野家の浪人、堀部彌兵衛大高源吾にて、今夕御隣家吉良上野介屋敷へおしよせ、亡君年來の遺恨を果さんとて、大石内藏之助はじめ、都合四十七人門前に行、唯今吉良氏を討亡し候處、近隣之御好、武士の情、萬一御加勢も被下候はゞ末代の御恨、奇代の御不覺と奉存候、願はくは門戸を嚴敷御防、火の元御用心被下候はゞ　忝奉存候とて、いひも果さずたちまち出る、其聲の神妙なることいふべくもあらず、今は俳友も是までおりとて、其角幸こゝにあり、生涯の名殘を見んとて、門前にはしりければ、おの〳〵吉良家にしのび入しほどに、

我雪と思へば輕し笠の上

と、高々と呼ばゝり、門戸を閉ぢて内を守り、塀越しに灯燈を高くし、始終を窺ふところ其あはれさ骨身にしみ入り、女人の叫び童子の泣聲、風飄々とふきさそふて、曉天に至りては本懐己に遂したりとて、大石主税、大高源吾、穩便に謝儀を伸たるは、武士のほまれといふべきなり。

日の恩やたちまち碎く厚氷

と申捨たる源吾が精神、いまた眼前にわすれがたし、其公年來熟魂故、具に認進申候、

早春は彼是御指操御出府も候はゞ、彼落着もうけたまはり届、無餘儀伏劍に及候はゞ、窃に追善も相營可申候、先は餘日も無之、書餘期貴面之時候、恐惶謹言。

十二月二十日　　其角

文浣様

尚々早春御出府偏に頼上候、以上

鶯やこぼらぬ聲を朝日山
土器の手際見せばや菊の花
五月雨や傘につけたる小人形
白雨や家をめぐりて家鴨なく
花盛り子であるかゝ夫婦かな
うら枯や馬も餅くふ宇津の山
ほとゝぎす一二の橋のわかれ哉
寐心やこたつふとんのさめぬ内
かつらきの神はいつれぞ夜の雛
夕立や田をみめぐりの神おらば
一どうに給になるや黒木賣
聲かれて猿の歯しろし峯の月
稲妻やきのふは東けふはにし
筆おきて机にとるゝや福壽草
明星やさくらさだめぬ山つゝ
小娘の老先しかしかけをとり
歸る雁米つきもふるさとやおもふ
我雪と思へば輕し笠の上
我物と思へはかろし傘の雪
冬來ては案山子にとまる鳥かな
蚊ばしらに夢の浮橋かゝるなり
傘持も月におくるゝ姿かな
初雪に此の小便はなにやつぞ
憎まれてなからふる人冬の蠅
夕すゞみよくぞ男に生れける
饅頭で人をたづねて山ざくら
雪の日や船頭どのゝ顔のいろ
文月やひとりはゞしき娘の子
涼しさや船に船頭のちらしがみ
寢る恩に門の雪はく乞食かな
名月や疊の上に松のかげ
爐開きや汝をよぶは金の事
梅が香やとなりは荻生總右衛門
酒をつま〳〵を妾の花見かな
秋の空尾上の杉をはなれけり
文は、あとに櫻さし出す袂かな

行水や何にとゞまる海苔の味
七草やあけぬに婿のまくらもと
藪入や牛がてんしん小原まで
松飾り伊勢が家かゑ人はたそ
腰のして念佛申す田植かな
饅汁にまたはんゞうのうわさ哉
一兩が花火間もなき光かな
つみ綿で兎の耳をひきたてよ
豆をうつ聲の中なるわらひ哉
茸がりや花のさきなるうたがるた
白魚をふるひ寄たる四手かな
朧とは松のくろさに月夜かな

金ひとつうれぬ日はなし江戸の春
川上は柳か梅かもゝ千鳥
有明の面おとすやほとゝぎす
なれ聞としぐるゝ夜の鐘の聲
烏帽子やは烏帽子着て見よ今日の月
やりくれて又やさむしろ年の暮
小男鹿や細き聲よりこのなかれ
みじか夜を吉次が冠者に名殘かな
よきゝぬの殊にいやしき相樸取
菊の露凋るゝ人は鬢帽子
明る夜のほのかにうれしよめが君
百八のかねて迷ひや闇の梅

うすらひや僅にさける芹の花
酒に花僧ともわびん鹽さかな
菊をきる跡まばらにもなかりけり
鶯のとは路ながら禮かへし
花笠を被せて似合ん人はたれ
鶯に長刀かくる承塵かな
あたなりと花に五戒の櫻かな
家とぼつ木立もさむし後の月
笹の葉に枕付てやはしむかひ
鶯のあかつき寒しらり〳〵す
しばらくは蠅をうちけり韓退之
須磨の浦うしろに何を閑子鳥

紅葉には誰がをしへける酒の燗
猫の子のくんづほぐれつ胡蝶かな
小坊主や松にかくれて山さくら
白魚やのりは下部のかい合は
曉の雲をさそふやほとゝぎす
風や沖より寒き山のきれ
鶯にくすりをしえん聲の文
波へふる霰や雲に波の音
庖丁の片袖くらし月の雲
烏帽子着た船頭はなし都鳥
菜の花の中に城あり郡山
傘持つも月におくるゝ姿かな

いつしかに稲を干す瀬や大井川
青梅や淺黄になりて秋のくれ
杜若たゝみへ水はこぼれても
初雪や門に橋あり夕まぐれ
弱法師家門ゆるせ餅の札
梅の木やこの一すぢを蕗の薹
山姫のそめがらながす紅葉かな
かりのはら見送る空や舟の上
屋根ふきとならんひふける菖蒲哉
寢る時分に又見ん月か初さくら
守梅のあそび業なり野老賣
蓬萊の松に立てるや曾根の松

魂まつり門の乞食の親とはん
鷺の身をさかさまに初音かな
からひたる三井の仁王や冬木立
西瓜くふ奴の髭のあがれけり
六尺も力おとしや五月雨
夜かぐらや鼻いきしろきかんの穴
まな板に小判ちらけりゑびす講
松原のすき間を見せる時雨かな
花水にうつしかへたる茂りかな
とはしるも顔に匂ひつる薺かな
鶴さもあれ顔淵生きて千々の春
庭かまど牛も雜煮を居りけり
削掛け膏藥ぬりの鼻にあれ
畠から頭巾呼びけり若菜つみ
若草やありし野寺の馬つゞき
ひつくりと岨の枯木もかすみけり
なつかしき拔のはげめや梅の花
鶯や十日すぎてもおなじ梅
初午や賽錢よみは芝居から
葛飾や江戸を見眞似の凧巾
舞鶴や天氣さだめて稲下し
雀子や明り障子に笹のかげ
蝶とぶや猿を呼びこむ煎屋敷
はつ夢やひたひにあるた扇より
七草やあとにうかるゝあけがらす
そなたにも女房よばせん水祝ひ
草堤をつゝむ葉もなき雪間かな
人の世や長閑する日の寺ばやし
影法師はよその田をうつ夕日哉
藪入のはやいにろくあ貌はなし
渡し舟武士はたゞのる彼岸かな
沓足袋や鐙にのこる初ざくら
すた〳〵とつむや摘まずや土筆
鶯につかり出たてひきがへる
景政が片眼をひろふ田螺かな

世忘れに我酒かはん嫁の雛
人は人を戀のすがたや花に鳥
黄昏の端居はじむるつゝじ哉
藤咲て松魚喰ふ日をかぞへけり
孫どもの蠶やしなふ日和かな
身にとりて衣更憂き卯月かな
夏の夜は寐ぬに疝氣のれこりけり
蚊遣火やかやつる方に老一人
くれなゐに團扇のふさの匂かな
僧正の青き一重やわかゝへて
殿つくりならへて床し桐の花
蝙蝠や宇治の晒にうすくもり

順禮はよそにをがむや雞合
花見かな母につれだつめくら見
小鳥居は葉守の神かつゝじ山
鳥雲に餌差ひとりの行衛かな
鳶に乘て春を送るに白雲や
今日にかはる淨瑠璃殿や青すだれ
夜半や寐ん紙帳に風を入る音
生の松いかに忘れん汗ぬぐひ
散際は風もたのまじ芥子の花
卯の花やいづれの御所の加茂諸
竹の子や竹より奥に犬あらん
雨蛙芭蕉にのつてそよぎけり

切られたる夢は實か蚤のあと
番附をするも祭りのきはひかな
花菖蒲幟もかをるあらしかな
八兵衛や泣ざなるまい虎が雨
汁鍋に笠のしづくや早苗取り
内川や鴉の浮巣になくかはづ
八雲たつこの嶮嶂を雲の峰
夕顔や一うすのこす花の宿
手にとるゝ林檎は軸でおもしろし
小屋涼し花火の筒のわれる音
かれや來ぬ一夜よし原天の川
上手ほど名も優美あり相撲取

目通りを丘の榎の築さかひ
傾城の夏書やさしや夏念佛
雨雲や竹も醉ふ日の人あつめ
舞坂や闇の五月のめくら馬
瓜守や松魚の膾たべしより
羽抜鳥なくねばかりぞいらこ崎
水うつて蟬も雀もぬるほど
さながらに花にはあかぬ百日紅
蚊も蠅もみなつき流せ御秡川
笹の葉にまくらつけてやはしむかひ
露の間や淺茅が原へ客草履
朝霧に一の鳥居や闇の音

水の蜘一葉にちかくおよぎよる
木綿とり伊駒の上は雨の雲
鈴虫や松明先へになはせて
美女美男燈籠にてらす迷ひかな
稻なきやひよこをにぎる稻の中
乙鳥も御寺の太鼓歸りうて
早稻酒や稻荷呼出す姥がもと
生栗をにぎりつめたる山路かな
初雪は盆にのるべき詠かな
雪の門樒ありやと問はれけり
霙にも身はかまへたり池のをし
炭屑にいやしからざる木の葉かな

白馬の尾髮ふてどく芒かな
まくり手に松虫さかす淺茅かな
暮の山とはきを鹿の姿かな
生身魂酒の下らぬ親父かな
鷄の卵生み捨し落穗かな
墨染を鉦鼓にとなるきぬたかな
駒曳や岩ふみ立てゝ箱根山
高砂や禰宜の湯治の神無月
路の墓その根植おけ冬搆へ
山犬を馬のかき出す霜夜かな
かた炭もその木の葉より起りけり
山茶花や莚かけたる寺男

歸り花それにも敷かん莚切れ
河豚汁にまた本草のはなしかな
口切や袴の下に線蘿蔔
目ばかりを氣儘頭巾の浮世かな
千鳥あく加茂川こえてはち叩
行年や壁に耻たる覺がき

○服部嵐雪

幼名久米之助、長じて彦兵衛と稱す、淡路の人なり、黄落庵、寒寥堂、雪中菴、不白軒、玄峰堂等の別號あり、寶永四年十月十三日歿す、年五十四、駒込竹町當檢寺に葬る。

●胡蹇の記

よき日和月にけしきや村千鳥
牡蠣むくやわれには見えぬ水鏡
砧つきて又の寐さめや納豆汁
家々の留守居よるなり大社
豆をうつ聲のうちなる笑ひ哉

蜀山月冷し、枯蘇草堂、孤松空しく老ぬ高田城、魂を傷しひる哉夜の鵶、朝曇櫓の葉蔭にかんこ鳥といふ鳥の啼くめるぞ、雨をもよほしがはなる、殿造いらかこほれ、閨屋玉たれをみだりて、かしこくぞ蔦のまとはれるや、故園誰がためにかうばしきぞ、招くとも

來る人あらじ、一本薄うつろふとも、誰か恨みん雛の菊　鬼燈といふ草の一房植ゑ殘せし、これぞ京の上藺の住こし春やむかしなりけり、南窓に月あかれども、容色をがみ〳〵鏡にもあらず、白露粧ひすれども粉黛なし、雨に朽ち時雨に濡れて、杉の板戸の殘りたるに、其人のすさみなりけり、菊のいろ〳〵書さまじへたるに、

繪の菊に今朝も餓ゑたる胡蝶かな

猶山里の氣色ぞあはれにおもしろや、橘柱なかば朽ちて霜斜に置けり、茶店は年々の雪に傾き破れ、主雁埃拂はねば、燕客はやく歸りぬ、おのづから狐かはゆるの塒となりて、胡桃を碎く烏の嘴、梨を爭ふ村鳥の聲、寔に凶宅に餓えたるさまぞ悲しかりける。

木枯に梢の柿のゝこりかな

風樓に暮山を見れば、遠近雪畫屏をなすかとすれども、丹青いにしへの緣ならず、深地に芙蓉をかざれども、採蓮のまめやかなる童もあければ、泥龕月をにごして、影をいとふに堪えたり。

蓮の骨あはれは美女の屍かな

百士散走り、屋形隣境を分たず、蓮の原葎の巷となりにたれば、家鴨軒端をわすれ、主なき犬勢つかれ、行人の裾をしたふ、すべて見る物、聞く事一として哀ならずといふことなし、年移り時變じて、彌生山若がへり、山代水も元の心を汲るしる折いたりて、玉苗や稻葉の侍徒とかや、此所しろしめすべきに定まりぬ、民ぐさ君恩の德雨にめぐみ、肆廛のおといそがしく、貧村ふたゝび竈をおこす、かゝりければ埋木の花にあそび、雨より後の月に嘯く、からの大和の風俗詞、才種前に倍せり、千賀万壽と胡ぶり諷ひ終りぬ。

雪は豐年の若葉をこやし、櫻にあらぬ梢まで春の色を榮ふ、歸雁も花に逢ひ、常磐山予ぞ見捨る東路や、上野の花の吹雪は寒からず、目黑谷中の遲櫻おそしとや待つらんと思ふ心に、おもんばかることもあらしせず、雨ふらぬ朝な三月下旬、越後を他のしら雲と詠の捨てぬ。

其袋自序

なにくれとして天の袋あり、あらゆるこれが入物なり、人にかふくろといふ、母の稱なり、筆とらず物見ずとて父に追はれて、怖ろしこらし袋のからき目見しも、いつにわすれて底なし袋の、口もむすばずぞありすたれにたる、嘘袋は清輔の名けたるにはあらず、我ぞつきありきぬ、武士に番袋あり、有職に火袋あり、首にかけたる袋には、いかなるものを入れたるぞ、詩の袋とかや、春山暮月も李賀が袋におもし、歌の袋は、光廣のひきずり袋、それもやゝ重かりけん、爲憲が袋をかふらむとすれば、息くゞもりてむつかし、こゝに其袋々、花のしぼみたる、月のかけたる數々拾ひくゝり集て、我家の秘藏袋とす、蘭にもきせず、猫もかぶらず、元祿三年庚午の水無月、嵐雪自ら序す。

虱をとる辯

知らず身の毛いよだち、襟のほどうざ〳〵しつるが、飯粒の半したる物さすりあてたり疾く赦し放ち、眼鏡二重にたゝんで、かれがさまを窺ひ見るに、白き肉、黑き腸、呼吸

につれてうごめく、眼さら〳〵と見すへ、手足四つか六つかありて恐ろしげなるが、護摩堂にまします明王尊の似たり、虎には戰ひ龍とも爭ふべし、誠や必死の人の床には、かいふり戻て欺き睨むとてこそ本草には見えたれ、未だ死にまじきにや、尻かいむけてゆく、おそろしきと見ればこそさも覺ゆれ、己が姿のなべての虫に劣れるものかは、唄うたはぬは聲のなければなり、今少し身輕からば、待宵のふるまひもし兼やはすべき、簑虫にゆかりたる鬼の子なれば、斯世に疎みはてられたる、業生のほどこそつたなけれ、臭穢の中に質を禀けて、褌にもぐり、縫目にかくれて、人の血氣を犯し吸ふこと、蚊子の鐵牛を嚙むより獨甚だし、其生涯の終れるところは、火とりの中に細き煙ととび、木枕の角にからき耻をばさらされぬ、されば眞如の性のみてる事や、摩羯なにとかいへる魚の大百由旬なり、蟭螟の微細なるまでゆき渡りて、憎愛かはることなしとこそ見ゆれ内裏に物の化いのりける聖の、御燈の光に一夜しらみ拾はれたるに、化のこと治まりけるとて、智識の肌になれかとひて、德を同う言はれけるも、さるべき因緣にや、柱の穴に

生を貯へて、舊年の怨み人に報ふともせず、いかに許してんと、刀ひねくり槍とりしごくまでいらち思ふ間に、ころ〳〵ところげて見えず、こは漏らしつるはと、うろたへてあなぐりもとむれどなし、淵に物おとせし人の顔して手打ちはたきてより、夢もしらみにしらみ、しの〻めの空もしらみ果てぬ、自身坊が衣被ぎしものか。

朝顔の花はぞ口をあくびかな

●簑虫をさ〻にゆく辭

いで聞きにまからん、行程二十町をぞや、かの虫あきやすべき、よしや虫まつともあらじ、またるべき身にもあらず、面白や橋はふた國にまたがり、入江の釣舟は、まさま横さまに打こぎりぬ、鷺眠り鴎流れつ、駿河の山はいつこ〻ら來つらん、川隈おほふ程ちかし、致景興をふるひ、あかむともなきに、柴門の雫、衣の襟にひやこく、草の露わら履につめたし、あるじなくてやありけん、とがめもたまはず、さし入て見れば簑虫の聲鳴すましてつくりと居給ふ、おとろへをくらべれば、霜にいまだ壯なりしが如く、力を論ずれば風柳猶つよし、ふむ所座する所音なし、かみ子のふるければなり、ゆゑにぞこの聲は聞きしか、性のさはがしきにはなに戀しともきこえず、聞く事にもあらじ、見ることにもなけん、かれが情と閑人の閑と、猶閑人のすぐれたるなるべし虫よ翁のかしましからむ、鳴きぞ。

何の音もなし稲うち喰ふて蟲がな

●裝遊稿

星こぼれ、鳥快きあした鐵鞋を踏んでおどり出たり、掛羅を肩にやすめ、板子をあとにわがめ、長明が海道記一帖は、荷ふに重しとせず、意馬に鞭をかなて〻、獨歩の伊達ものとなれり、彼の一帖を見るに、便の人の芳緑に乘じて、俄に獨身の遠行を企てり、貞應二年卯月上旬、五更に都を出で、一朝に旅たつとかけり、折ふしのよく似たれば先達にたのみて、所々の指南とせんがためおり、足拇巨に手をあて〻といへるを、我が俳諧の葛藤にして、箱根路をたどり、ちまたの蟻に沓をとゞめて、蘆間の蟹の哀れを觀ず、古鄕

を箱根に隔てられて、三島の宿に寢ねたる夜、人々のはなむけせん句でもをとり出たり百里氷花は、志二つならざれども、おのれ〳〵の根性あり、ひとりはよろづわさ〳〵しとして、餞別の句も趣おしとて、うちやりにして、旅で死ぬよとつきはなせり、一人は行先後のこと取まかなひて、

孤をすつる思ひや花の山

といたはり出しぬ、車をれすあり車を曳くあり、彼も親しく、是も不疎、大道無門千著有道。

かへる雁關飛こゆる勢なり

原とはる日は、敕使の歸京ゑしゆすとて、海道も塵を拂ひ、山も耻かしげに、けふを晴とつくろひたてたり、おの簾はれあげられたるに、烏帽子の用意おんぞさら〳〵と見ゆ、おそらくは未だ聞がず、富士に雲井の客人を見る人は、仕合なる旅に參りあひたり。

富士を見ぬ歌人もあらん花の山

大井河ちかき島田の宿に、年頃たゞよひ遊ぶ僧の侍りけり、世の中を用なきものに思ひ取りて、宿へゆくにも戸を打ち明けて出歩行ける、一日如舟に誘はれて、留守のほゞ伺ひ入て、晝寢して歸りてのち、申しつかはしける。

やすき瀨を人にをしへよかきつばた

吉田の宿に日暮たり、橋のもと迄行たれば、舟よ〳〵とよぶ、何方へ乘ることゞと聞けば、參宮の道者、こゝより乘れば白子川崎といふ所へ着いて、陸には三日はやしといふ、身を持つものゝ、危き海路はいふかしとて、行過ぎるもあり、元よりつゝがぬ舟のかゝる便宜にしらぬ國里とも見はやと思ふ心つきて、笘の中さし覗きたれば、三四十乘込たり、多くは出羽の新庄、仙臺の拔參、遠州山梨かいつかの籠作りいもし、大坂の商人なんど、春正が蒔繪ごとく押合たり、夜すがら臑にかしらもたせて、明六つの汐合よしとて、船よろはひして一時ばかり走るに、風あしきといふ程こそあれ、十反帆をくるくると、地ぎりのやうに押卷き、船は茶うすになりて、横雨骨をしぼる、かくてはいかゞし侍

らんとて、島山を見かけてから〳〵船を寄せたり、所は伊勢の沖中にて、尾張よりしろしめせる代官あり、しの島といふ所なりけり、纔一里ばかりの丸島にて、人家百軒ばかりあり、いかさま港めきたれば、漁家に入てうかゞふ、あるじの老婆いと深切に、旅は憂きものにこそ侍る、姥も去年の比、白子の渡海に便船して、西國をうち侍るといふ、かゝるはなれ小島までも、大悲の恵みの行きわたりけるよと、尊く覺え侍りける、島の風俗は、八丈に似たりとかや、伊勢のしの島は、尾張八丈と所の諺に申しはべる、こゝに三日を經て、ぬけ參りのつかれたるに、精を求めて扶けあひぬ、ならいの風待得たりとて、われ先に爭ひ乘て、二見の沖立岩を見かけたるに、又西風強く出で、楫とり直せば、南にも北にもかはる、神鳴どろ〳〵と海庭に響き、各の顏夕ぐれ立て、電光髭にもえつく、左にたふれ右にうめく 船中夜のごとくに、只磁石をたよりに伊勢の方を祈るばかりぞ、暫くの人々の命ありけり、此時生涯の浮める事を思ふに、人々の首にかけ肌につゝめる黃金は、身を沈むるにあだなるべし、板子一枚には劣りたりける、兎角して物の見えたるは、山にてこそはべらめとて、そなたを便りに走る、伊良胡崎にてぞ侍りける、此島さきを吹きはなれて遠江灘へ出たらば、津輕の方へ流され侍らん、心うき人々をのせ合ひたりとて、水主も潮かきひすび、大秡はり〳〵とおしもむ、沖に漂ふこと半日ばかり、程を考ふるに、五十里も侍らんと云ふ、やうやく空靜まりて皆息出たり、鷹一つ見つけてと、芭蕉翁の申されたる所なれば、なつかしく立あがりて、

藤浪に鷗は得たりいらこ崎

けふは二見の御鹽を運ぶ日なりとて、內外の神垣も、殊に澄渡りおはしたるに、山田が原のはとゝぎす、襟のもとに落かゝりたり。

こゝろには松杉ばかり時鳥

義仲寺の師父の廟は、芭蕉しげり芭蕉破れて、十とせの露霜を送り迎ひ、苔生ひ玉へり。

色としもなかりけるかなあを嵐

加茂の御蔭祭の神事といそがしければ、日吉の社の後の祭に參り、坂本の宿にとまり

ぬ、こり木つみたる火燒く家の隅に、具足と太刀のほこりにまじりて侍りけるを、持ちつたへたるゆゑやあると尋ねければ、爰のあらはしにて、かばかりの兵具持たぬ家は侍らずと申しける、心にくかりければ、

あめくじり這ふて光るや古具足

加茂の足揃は、神人淨衣にさしぬきして、駒の足をためさる、帳の屋につきてとき遲きを定め、赤かた黑かたを分てるなり、けふは唯眞白にて馬上見わかず。

落ちたるがことに目立や足揃

五日の競馬はこゝ、森にうたひ芝生に醉へる、けふの名殘も暮かゝりたり。

あやめ草加茂のかり橋今幾日

十五日は今宮殿、七日よりお旅所の御出なり、當日小川を南へ神輿を渡し奉る、十八日まで夜宮に詣づ。

埋火を涼しとあふぐ夜的かな

一種賞翫にとて、皆川中にまじはり侍りて、

味噌摺に涼しき鰷の游かな

伏見にて、

明てのく家に伏見や夏の月

炬松ふつて野邊を行くも、爰もとの古風なるべし。

行燈で來る夜送る夜五月雨

祇園會の七日の鉾、十四日の山、綾、より錦より見ものなるは、萩野いぢらし松尾松村、素袍に太刀はきて、四條高倉の辻に床几を居ゆれば、下の雜色同じさまにて、紅のふさゝげたる鐵棒かいこみ、褐の上下着たる男等、墨染の榛手に〳〵持て紐をつくろひ、非常をいましむ、兼て定められなる一二の闘をあらためかへす、威儀嚴重なる中に、階子と臼と車につみて町毎にひくは、何の用にか侍りけん。

たて凹もともに踊るや祇園の會

河原のすゞみ、

來る水のゆく水あらふ納涼かな

千本を南へ、四塚のほとりへ行くとて、

島原のそとも染るや藍ばたけ

京より唐崎へ詣づとて、志賀の山越はすることなり。

志賀越とありし被や菊の花

七夕、

七夕や加茂川わたる牛車

飛鳥井難波殿の蹴鞠、池の坊の立花、都の田夫、いなかの風流、立て見るあり、居て見るあり。

秋風のうしろをのぞく立花かな

九日の六道參り、小野の篁の冥途に通へる道なりとて、洛中の貴賤まうでゝ、槇の葉も

とめて、魂をむかふるしるしとし侍る。

打てはひゞく物と知りつゝ迎鐘

今年は爰に盆をむかへり、なき者のこゝろざし深く、京へ〳〵といひける程に、舊跡を見るたび毎に、手向ぐさにもと思ひよりたるあり、彼はあそび者の果ながら、二十年來見しものなり、常におのれが罪懺悔して歎きける程に、物しれる人に見えさせて、公案といふものをひねくりけるが、いかに省ありけん、人に名のなきときは、いかによびはべらんといふを、口をひらかず問ひ來らば、耳を塞ぎて聞くべけれと答へたれば、いゑかしき顏して、猶ひねくりたり、尼になるべき望まず〳〵止まずなりければ、受戒させて雪山淨白と改名して、頭くり〳〵となりぬ、爰に乞食し、彼處に行脚せんも心やよしとて、悅びあへり、菴室も別にしつらひてんとて、其事となく用意せしに、病せちにせめて、其本意ばかりは遂げず終れり、けふはあとなく思ひ出で、くぎやうわりぎやうなどいふ物調べ、都心のたまむかへして、

魂まつりこゝがねがいの都なり

十六日は山々の送り火、如意嶽の大文字、松崎の妙法河原にも、麻がらに火とぼして、魂れくりし侍りぬ。

經を燒く火の尊さや秋の風

大文字の句をもとめたれば、雪の心の出けるまゝに、

山の端を雪にも見ばや大文字

里右が娘うしなひけるにつかはす。

鬼燈のさすればつぶす歎きかな

野の宮に參りて、

嵯峨中の淋しさくゝる薄かな

いばらに袖をひかれては、其日をくらし、道のちまたに尻をするて、二夜三夜と明す、みやこの家の棟もあまたかぞへぬ。

洛外の辻堂いくつ秋の風

歸、

痩る身をさするに似たり秋の風

清雲方丈へ行脚のいとま申入れたるとき、途中受用の一句を問ふに、隨て答申しければ、千手をともかへらずと、名殘捨たまへり、この秋かへり罷りて、

野に寢たる牛の黑さを秋の月

師問云、去春望別送乙片語、今秋歸來相見了也、即今如何 是行脚眼、某答云、觀音境裏古松樹、師云、松無古今乍麽生無古今色的一句、某進云、春色無高下花枝自短長、師頷之休去、某拜退參堂去。

文もなく口上もなし粽五把

初空や鳥をのせる牛のくら

元日やはれて雀のものがたり

五十にて四谷を見たり花の春

順禮どうちまじりゆく歸雁かな
行燈で來る夜送る夜五月雨
門の雪白と盥のすがたかな
名月や煙はひゆく水の上
打てばひゞく物と知りつゝ迎鐘
正月も二十日になりて雜煮かな
魂まつりこゝがねがひの都なり
鬼灯のさすればつぶす歎きかあ
立出てうしろあゆみや秋の暮
經をやく火のたふとさや秋の風
一葉ちる咄一葉ちる風の上
梅一輪〳〵ほどのあたゝかさ
七夕や加茂川わたる牛車
若水に智惠のかゞみをみがゝばや
嵯峨中の淋しさくゝる芒かな
れもしろう富士に筋かふ花野かな
洛外の辻堂いくつ秋の風
ほつ〳〵と喰積あらす夫婦かな
ぬれ椽やなづなこぼるゝ土ながら
痩る身をさするに似たり秋の風
武士の足で米とぐあられかな
竹の子や兒の葉莖のうつくしさ
初秋の心動きぬ繩すだれ
蒲團着て寐たる姿やひがし山

澤潟の太り過たるあつさかな
味噌摺に涼しき鰷の游かな
此下にかく眠るらん雪ぼとけ
藤浪に鷗はえたりいらこ崎
黄菊白菊その外の名はなくもがな
富士を見ぬ歌人もあらん花の山
蝸牛這ふてひかるや古具足
あけてのく家に伏見や夏の月
裾折て菜をつみしらんくさ枕
五位六位色ときませよ青すだれ
鵜脊の塵にえらるゝ蕨かな
蕗の薹はうけて人の詠め哉
君見よやわが手入るゝぞ草の桶
唐の蚊やついに枯たる藻鹽草
松虫のりんともいはず黑茶碗
落たるか殊に目だつやあし揃
蓮の骨あはれは美女の屍かな
こゝろには松杉ばかりほとゝぎす
眞夜中やふりかはりたる天の川
うぐひすにはうといきする朝哉
楪の世阿彌まつりや青かつら
花すゝき大名衆をまつり哉
祝ふをば見よや初子の玉はゝき
嬉しひか念佛おどりのひさくふり

游鼠喰ふはきたないものか御僧達
下闇や地虫ながらの蟬の聲
今少しとしよりみたきはちたゝき
萬歳や左右にひらいて松の蔭
早乙女にかへて取たる菜飯かな
石女の雛かしつくぞ哀れなる
白露や角に目をもつ蝸牛
志賀越となりし被や菊の花
菜の花や戸口見つけて廻りゆく
秋風のうしろをのぞく立花かな
猫の來ておもりにかゝる衾かな
野に寢たる牛の黒さを秋の月

行燈を月の夜にせんほとゝぎす
濡樣やなゞなこぼるゝ土ながら
七夕やふりかはりたる天の川
花はよも毛虫にならじ家櫻
世話しあき身は痩にけり作獨活
盆までは秋なき門のとうろ哉
立臼もとものおどるや祇園の會
顔につく飯粒蠅に與へけり
來る水の行水あらふすゞみかな
島原のそとも染るや藍ばたけ
花に風かろく來て吹け酒の泡
正月も二十日になりて雜煮かな

出代やをさな心にものあはれ
大勢の中に一本かつをかな
何の音もなし稻うち喰ふて蚤かな
あやめ草加茂の假橋けふ幾日
朝顔の口はゞひらく欠伸かな
鹽うをの腹はす日なりころもがへ
庵の夜もみじかくなりぬ少しづゝ
喰物もみあみつくさし魂まつり
水音も鯀さびけりな山里は
菜の花や戸口見つけて廻り道
神風の彌生はふるし門の竹
白つゝじ招くやうなり角櫓

山の端を雪にも見ばや大文字
こがらしに梢の柿の殘りかな
孤をすつる思や花の山
顔だしてはつみを請はん玉あられ
しだり尾の長屋〳〵にあやめ哉
うつくしき形もちながら毛虫かな
鋸にからき日見せて花つがき
やすき瀨を人にをしへよかきつばた
見たき物花もみしより接穂かな
酒くさき人にからまる胡蝶哉
逢坂は關のあとなり花の雲
春の水に秋の木の葉や柳鮠

古庭にあり來りたる牡丹かな
簑なして朝々ふるふ螢かな
飴賣の箱に咲けり百合の花
夏の日に嫩き飴のもやしかな
晒井やうきよはかはる水こゝろ
星合に我妹かさん待女郎
盗みたる蘭や乞食の簑の下

○向井去來　名は兼時、字は義焉、平次郎と稱す、後治郎太夫と改む、肥前長崎の人なり、慶安四年生れ、寶永元年九月十日歿す、年五十四、京都西山眞如堂に葬る。

●鉢叩辭

若葉ふく風や煙草のきざみよし
五月雨や蚯蚓の通す鍋の底
照つけてひかりも暑し海の上
澄かねて里迄出づる山清水
夏痩やともしび遠く詠め居る
相撲取ならぶや秋の唐錦

師走も二十四日、冬もかぎりなれば、鉢たゝき聞かんと例の翁のわたりましける、こよひは風はげしく、雨そぼふりて、とみにも來らねば、いかに待わび給ひおんと、いぶかりれもひて、

帶こせ眞似にて見せん鉢たゝき

と灰吹の竹うちならしける、其聲妙なり、火宅を出よとほのめかしぬれど、猶あはれなるふしぶしの似るべくもあらず、かれが修行は、瓢簞をならし、鉦うちたゝき、二人三人つれてもうたひ、かけ合ひてもうたふ、其唱歌は、空也の作なり、かくて寒の中と、春秋彼岸は、晝夜をわかず、都の外七所の三昧をめぐりぬ、無縁の手向のたとふければ、かの湖春もわが家はつかしと いへり、常は杖の先に茶筌をさし、大路小路に出で、商ふ業かはりぬれど、さま同じければ、たゝかぬ時も鉢叩ぞと、曲翠は申されける、あるひはさかやきをすり、或ひは四方にからげ、法師ならぬ姿の衣引かせたれど、それも墨染にはあらず、多くは萠黄に鷹の羽うちゝがへたる紋を付けて着たれば、月雪に名は甚之亟と越人も與じ侍る、されば其角法師が、去年の冬こと〴〵く寢覺はやらじと吟じけるも、ひとりさくにやたへざりけむ、うちとけて寢たらんは、かへり聞んも口をしかるべし、あ

かしてこそとのたまひける、横雲の影よりからびたる聲して出來れり、實に老ぼれ足よはきものは、友ぢちにもあゆみおくれて、ひとり今にやなりぬらんと、翁の

長嘯の墓もめぐるか鉢たゝき

と聞えたまひけるは、このあかつきのことにてゞ侍りける。

●後磨山賦

十月八日は、たゞときちかひありて、ちかき山寺に佛をがむとて、こゝの遊女どもの月まうでするなり、唐舟も人つどふ湊なれば、浦〻の景色さへうちさはぎて、秋風の折にふれては、葛の葉のうらみ顔に、磯邊の雁の大空に吹なされて、そゞろに人を思ひ驚くあらむ、それが中にも、はかなき世を契り、諸友に苔の下になゞゝ、一筋に思へらむ、人もあるべしとあらぬ心さへ取そへられてかなし、見渡したる人々の、おのが國びいきに物くらべしあそばむにも、難波の浦のあしさまにはいはぬをとひたすらに、あまの子のあさましとのみ思ひあなづりて、都の商人も手袋ひきたるためしおはしとかや、かゝることなどは、いひたるべき年のほどにはあらぬを、西花坊にこの詠の賦つくりたりと、ほのめかされて、つひに後の賦のぬしとはなり侍りける。

いなづまやどの傾城がかりまくら

●落柿舍記

嵯峨にひとつのふるき家はべる、そのほとりに柿の木四五本あり、六とせ五とせ經ぬれど、このみも持來らず、代かゆるわざもきかねば、もし雨風に落されなば、王祥が志にも恥ぢよ、もし鳶烏にとられなば、天の帝のめぐみにも洩れなむと、屋敷もる人も常はいぶみのゝしりけり、ことし葉月の末かしこにいたりぬ、折ふし都より商人の來り、立木にかひもとめんと、一貫文さし出し悅びかへりぬ、予は猶そこにとゞまりけるに、ころ〳〵と屋根はしる音、ひし〳〵と庭につぶるゝ聲、夜すがら落もやまず、明れば商人の見舞來り、梢つく〳〵と打詠め、我むかふ髮の頃より、白髮生るまで、この事を業とし侍れど、かくばかり落ぬる柿を見ず、きのふの價かへしくれたびてむやと詫ぶ、いと便な

ければゆるしやりぬ、この者のかへりに友どちのもとへ消息送るとて、みづから落柿舎の去來と書はじめけり。

●霊虫傳

浮世に米といふ虫あり、母は出雲の國稲田姫のながれとかや、父はゆくへもしらぬ稲のとゝの、夜な〳〵かよひ來りて、かくは稲穂の孕み初めけるとなむ、故郷に遊び侍りし中は、川水にやしなはれ、案山子法師にもりそだてられ、やゝおひたちぬるまゝに、賤の伏屋に籾とすばれ、晝はあら莚の上にならび、夜はせばしき俵の中に臥す、されど久しく民間にとゞまらず、地頭代官のもとに上げられ、或ひは鞍つぼに這のぼりて、須磨逢坂の關を踰え、あるひは船板に飛移りて、敦賀、下田の沖をはしる、終に商家の藏の中にかくれて、恐ろしき空音を啼出しぬるは、あやしき里に春の花に鳥に戯れ、秋の虫の露をかおしめる思にもあらず、時しらぬ虫の音ながら、春は一しほ音もまさりけり、又は早うちつゝき、雨風さはがしき年の暮には、必ず高ねを出して婆婦の胸をおどらせ、窮士の腸をたゝせるのみか、乞食などの是になき殺されむも、いとあはれ深かるべし、常に國々より集りて、多きときは音弱く、旁々にわかれて少なきときは音つよし、誠やみずからならずして、人の口をかりて音をふるゝと、あだにあやしかりける虫のわざなり、ただ富貴の庭にあそべることをよろこびて、貧賤の竈に入ることを耻づ、しかはあれど家々にかひとられ、唐櫃の中のからき目みしより、長く晝寢をとゞめて、いつとなくへり失せけるにぞ、人々は皆あきれ果侍られける。

●六玉川後賛

田中の山本といへる所多く、松村四日市の名も少なからねば、玉川の數も六には限るまじきを、たゞもてはやす人のめでたければ、其名の共に聞ゆならん、されば人は所によりてなつかしく、所は人をまちてあらはるべし、しかるを玉とよべる名の故あり、我君百丸子は、これを知り玉ふにや、先よ井出の玉川は、殊に山吹の咲亂れて、花には黄土葉には青玉と置そふ露の玉川あり、次は卯の花垣の白妙に見えて、小夜ふけ方の時鳥の、

蜀の國より津の國まで、鳴て飛來れる玉川あり、三にひさし野の玉川は、さらす調布のさら〳〵と流れあへる砂玉川なり、野路の玉川は、外のけしきに引かへ、萩の錦に波こえて、色ある月の玉川なり、その五は、川の淺瀬も見えず、夕汐の千鳥も、とみに吹あげられて、川にさはげなるれ玉川なり、終は、名にし負ふ高野の奥にて、旅人のもし忘れても汲みや侍らんかと、大師のあはれみ給ひける、衣のうちの玉川なり、もしや人ありて、わが言のたしかならずと云はゞ、玉に卞和が足をきられて、跛ひきたるためとも見るべし。

◎鼠賦（此賦は五音相通ずる假名字を以て音となせり）

鼠、一の名はよめが君、又よめともよめり、其たね品あり、四尺の鼠は、圖はづれにして、大なるは五六寸、ちいさきは寸にみたず、山椒の眼小豆の鼻、齒は絲をつけて小袖も縫ふべく、耳は木の芽のめだつに似たり、尾をつきて錐のさやとなさばなしてむ、背腹の色にめでて、薄くも濃くも染出せり、其行や夜出で晝かくる、常にぬすみをもて身を養ふ、誠に憎むべきものゝ一なり、乃ち賦を作りて曰く、

二日鼠の穴を塞ぐ、つく〳〵汝がいたづらを思へ、家に居て人を恐るゝは、足のうらに疵持ちけらし、油をのむこと世の酒にひとしけれど、いつしか沈醉を見ず、粟を盡し器をそこなふは殊更にいはじ、大棗をかむ牙にふるれば病を生ず、はづかしき文をちらして、男女の中をも妨げ、あやしき巢をつくりて、源平の亂をさく、何をへつらひて、佞人のためしに引出られ、いかにすゝめてか、書を焚て代の宰相となしぬる、神佛のたふときも、尿糞に汚し奉る、草の根をはむ月の鼠は、俊成卿のうらみなりけり、つく〳〵汝が危きを思へ、それ人のさかしきや、萬木鬱をまさき吹矢を儲け、鵜をぬりて往來もたやすからず、けはしき城をたのむとも、鼬を防ぐ手段はあらじ、杳なる空をながめては、鳶のつかむ愁わするべからず、桁走り障子のぼり、早業得たり顔なるも、思はず桝にかゝりて、いかばかりの思をすらむ、虚死して仕合に東坡が袋をにげたりとも、生捕られてなまなか張楊が文をうけなむ、或ひは鈴を頸にさげて兒童の戯れとなり、あるひは筆の用

に髭をぬかれて老の悔を殘せり、あやまりて晝鼠とあなづられ、濡鼠と笑はれ、更に吹鼠こくるしみて、人の爲にぞよろこばれぬる、我さへかなしきを、燒鼠となりて狐狸の命とらむこそ、淺間しく罪深けれ、つくづく汝が尊きを思へ、日よみの初に呼ばれて位司賤しからず、百敷のかしこきも、甲子をむかへて年の號あらため玉ふぞかし、あら玉の春たちかへれば子の日の助賀あり、子祭といへるは、いづれの長者の傳へなる、から の大和の歌にもよめり、海原やもしほの蔭にともなふなまこは海鼠とかゝれ、秋風の尾花が末に妻こふ鶉は舊鼠の化したるなり、烏羽王の闇き夜はいかづちともなれり、象といへる獸すらかつ恐懼れぬる、麝香猫は筑紫に住なれてこと國にゆかず、あづさ姿のわかやかなるは嫁入の繪空事にぞ、とこの乙子を七郎とは申す、新左衛門とつけるは、さかやきすりての後なるべし、大ねら小ねら、はた廿日鼠と名のり、月々十二の子を生む、誰が家にか取盡し得む、もし白子出で福の神にや愛せられむ、汝が隱里いづくのほとりにや、武藏野の鼠穴にや、出ぬの境の鼠が關なるか、信濃の奥の鼠宿なるか、目出度身をもてかり初の世をおさふる、なぞかかへらんことを思はざる、窮鼠かへりて猫を嚙むの志ありとも、三井の賴豪が千疋の勢すら、本意を遂ぐることは猶聞えざりけり。

●落柿舍の壁書

一我家の俳諧に遊ぶべし。
　世の理屈をいふべからず。
一朝夕かたく精進を思ふべし。
　魚鳥を忌むにははらず。
一速に灰吹をすつべし。
　煙草を嫌ふにはあらず。
一隣の居膳をまつべし。
　火の用心にはあらず。

●丈草誄

今年二月末の四日、月は草菴に殘るものから、禪師身まかりたまひけりと、湖南の正秀が許よりしらされけるにゞ、胸ふさがり涙とゞめかねぬ、つく〳〵此人のむかしを思ふに尾張の國に生れ、犬山に仕へて、勇猛の名もありしとかや、一日若黨一人を具し、ひそかに君父の地をしのび出で、道のかたはらに髪おし切り、墨染に引きかへられげる、常の物語には、指に痛ありて、刀の柄握るべくもあらねば、かく法師にはなり侍るとなり、或人のいへるは、其弟に家祿讓り侍らんとて、かねて人しれず志ありと、病にはいひよせられけるとなむ、其後洛の史邦にゆかり、五雨亭に假寢し、先師に見えそめられしより、二疊の蚊屋の内に頭をおし並べ、四間の火燵の上に面をさしむけて、吟會多くは此人をかゝず、先師の言葉に、この僧この道に進み學ばゝ、人の上にたゝむ事、月を踏ゆべからずとのたまへり、其下地うるはしきことを羨ひべし、然れども性くるしみ學ぶことを好まず、感ありて吟じ人ありて談じ、常にこの事打忘れたるがごとし、先師深川に歸り給ふ頃、この邊の句ども書あつめ參らせける内、

大原や蝶の出て舞ふればろ月

などいへる句、二つ三つ書入はべりしに、風雅のやゝ上達せることを評じ、この僧なつかしといへとは、我方へのつたへなり、又難波の病床、側にはべるものに伽の發句をすゝめ、けふより我死後の句なるべし、一字の相談を加ふべからずとのたまひければ、或ひはふけひより鶴を招かむと、折からの景物にかけてことぶきを述べ、あるは叱られて次の間に出ると、たまりなき思にしほれ、又は病人のあまりすゝるやと、睦じき限を盡しける、其ふし〳〵も等閑に見やり、たゞうづくまる寒さかなといへる一句のみぞ、丈草出來たりとは感じ給ひける。實にかゝる折にはかゝる誠こそうごかめ、興をさぐり作を求むる暇あらじとは、其時にこそ思ひ知り侍りけん、先師遷化の後は、膳所松本の誰かれたふとみなつきて、義仲寺の上の山に草庵を結びければ、時々門白啓、曲々水相道あゞと打吟じ、なるは杖を横たへ、落柿舍を叩て。

飛込んだまゝか都のほとゝぎす

とも驚かされ、予も彼山に這のぼりて、脚下琶湖水、指頭花洛山と、眺望を共にし侍りしを、人は山を下らざるの誓あり、予は世にたゞよふの役ありて、久しく逢坂の關踰ゆる道も知らず、去々年の紳無月、一夜の閑をぬすみて草庵にやどりて、

さびき夜やおもひくれば山の上

と申して、今霄の芳話によろづを忘れけりと、其喜も斜ならず、ふけゆくまゝに雷鳴地にひびき、吹く風扉をはなちければ、虚室欲誇閑是寳、滿山雷雨震寒江と興じ出でられ、笑ひ明して分れぬ、身の上を啼く烏かなと聞えし、雪氣の空も二たびゆきめぐり、今むなしき名のみ殘りける、凡十年の笑は三年の恨に化し、其慨は百年のかなしみを生ず、をしみても猶名殘惜しく、此一句を手向けて、來し方行末を語り侍るのみ。

なき名さく春や三年の生別れ

吉野山またちるかたに花回り

山はしやこゝにもひとつ花の客

心なき代官どのやはとゝぎす
松茸や人にとらるゝ鼻の先
鶯や内のも啼けば野から來る
山里の蚊は晝中に喰ひけり
都にも住よしけり相摸取
のぼり帆の淡路はなれぬ汐干哉
はつ露や猪のふしゝばの起あがり
かゝる夜の月も見にけり野邊送り
うき友にまかれて猫の空ながめ
朧月一足づゝもわかれかな
立わりく人にまぎれて涼かな
竹の子の時よりしるし弓の竹
應々といへどたゝくや雪の門
痩はてゝ香に咲く梅の匂ひかな
薄壁の一重は何かとしの暮
たけの子や畠となりに惡太郎
知人にあはし〳〵と花見かな
つゞくりもはてなし坂や五月雨
月見せん伏見の城の捨やぐら
ひとり寢もよき宿とらん初子日
鶏もはら〳〵時か水雞なく
涼しさや浮洲の上のざこくらへ
名月や椽とりまはす黍の虚
名月や海も思はず山も見ず

榾の火におや子足さす佗ぬ哉
魂棚の奥なつかしや親のかは
尾頭の心元なき海鼠かな
何事ぞ花見る人のなが刀
有明にふりむきがたき寒さ哉
時鳥なくや雲雀の十文字
元日や家にゆづりの太刀はかん
月雪のためにもしたし門の松
木枯の地にも落さぬ時雨かな
百性も麥にとりつく菜摘歌
夕暮や呵ならびたる雲の峰
一戸や衣もやふるゝ駒むかへ

春や祝ふ丹波の鹿もかへるとて
湖の水まさりけり五月雨
動くとも見えで畑うつ男かな
乘ながら秣はませて月見かな
岩端やこゝにも獨り月の客
荒磯やはしりなれたる友千鳥
十六夜や慥にくるゝ空の色
涼しさや夕立ないやら入日影
瀧壺もひしげと雉子のはろゝかな
おもしろや松笠もへよ薄月夜
振舞や下座になはる去年の雛
蘆の穂に箸うつかたや客の膳

欠

御神樂や火を焚く衛士に何やらん　老樂の口もと寒し御佛名

○西山宗因

名は豊一、通稱次郎、屈後の人なり、後京都に來り、又浪花に移り、俳諧環林を開く、向榮庵、野梅翁、忘吾齋、一幽、西翁、梅翁等の別號あり、天和二年三月二十八日歿す、年七十八、大坂西寺町西福寺に葬る。

●向榮菴記

正保の末のとし長月比に、津の國中島のわたり、天滿宮のほとりに、假にうつろひしが、かくて後、十とせばかりやになりけむ、いにし年の冬つかた所をかへて、すこし程へだたるやうなりしを、もろ〳〵の力にたすけられて、又さらに御やしろのかたはらに、此草庵の地を求めて、かたばかりにしつらひ侍る、時しも菊月の半ならん、その菴すでに成んぬ、あるは東籬の園をたつねて、悠然として趣を示し、あるは南陽の流をくみて、悠然として壽をのぶ、仍て名づけて向榮菴とはいふなり、まことによるべの水の元にやなりけむと、仰げばいよ〳〵たかく、念ずればます〳〵新にして、瑞籬の久しかるべき末葉をねがひ、石上のふりにし道の冥加あらせ玉へども、時に天滿の御蔭明けき曆の二年

欠

中の五日になむ、一句二首をつゞりて、此告文をさゝげ奉りける。

有明の油ぞのこるほゝゝぎす
世の中や蝶〳〵とまれかくもあれ
くれ安しこんなことなら百年も
なかんとて花にもいたし首の骨
秋はこの法師すがたの夕べ哉
さればこゝに談林の木あり梅の花
革蹈皮もむかしは紅葉ふみ分たり
菜の花やひともと咲し松の下
西風のなんぞ自力の扇づれ
里人のわたりさぶらふ橋の霜

白露や無分別なるおきどころ
立安しこんなことなら百とせも
やがて見よ棒喰はさん蕎麥の花
螢火も百がものあり滑川
朝夕の人もめづらし今朝の春
新舊の御慶はふるき言葉かな
たてとこそ風狂亂の姥櫻
ほゝゝぎすなくやら淀の水ぐるま
難波津にさくやの雨や春の花
移りゆくはやいかのぼり紙幟

峯入は宮も草履の旅路かな
夏山や或は野にふす伏見船
郭公いかに鬼神もたしかにきけ

○内藤丈草

幼名を林之助といふ、尾張犬山藩の重臣なり、遁世して芭蕉の門に入り、俳名時に高し、寛文三年生れ、寶永元年二月二十四日歿す、享年四十有二、近江粟津龍ヶ岡東林の中に葬る。

●芳野賦

思ひこめて見るべき花の若葉哉
夏の夜やひがしはなしに月は西

よし野を御吉野と云ふは、皇居の地なればなり、山川里嶺高根尾上山の井花園を詠ず、すべて二十一代の歌數三百七十餘首、猶家々の集、物語類、詩連俳諧の類、佐川田喜六があさな〳〵、貞室老人のこれは〳〵までかぞふに、なか〳〵いとまなからん、されども ろこしの吉野とはおほいもうちぎみの俳諧の歌より始り、芳野川花の音するとは、慈鎮和尚の大きなる歌の手柄なり、川は巴が淵より分れて、紀の和歌山に落ち、山は大峰よりつゞきて那智高野につらなれり、藏王堂は三とところに安置し、一郡は八郷とかや、上

市よりは飯貝にわたり、下市をこえては、六田よりのぼる妹背山をへだて、高取の城に向ふちもとの櫻、日本が花、櫻田の谷、さくらが嶽、關屋の花、瀧ざくら、雲井櫻、布引の櫻、花矢倉、花籠の水、嵐山は、鷄山の御宇に都にうつされ、袖振山は天武帝より五節の舞を始む、清見原の天皇は、國栖人の船にかくし、後醍醐帝は吉水院を皇居に定む、義經も此院に宿り、秀吉も此等を本陣とす、賀名生は要害の御所、如意輪寺には御廟を築く、廚子の扉に、南朝勅作の詩をみづから遊ばし、過去帳の奥には、楠正行最期の歌をとゞむ、判官の鎧、辨慶が太刀、口の山門は彦四が痛腹の處、つゝがじ岡は、忠信が空腹の地なり、勝手の寶藏には靜が舞の裝束をおさめ、子守の拜殿の歌仙は、定家卿の眞蹟(炎上の後狩野永德が筆なり)櫻木の宮、金情の明神、力乞の不動、廻り地藏尊、尊の御影堂には、花供養の餅をなき、五臺寺櫻本は當山の先達なり、大瀧宮瀧河西の瀧高瀧蟬が瀧、清明が瀧菜つみ川、とく〳〵の清水、外象の橋、神子の水鷲の尾の鐘、龍返しの岩、龜石玉石大形殿八丸塚、若菜の鳥居、鎧懸の松、かげろふの小野、猿引坂琴堂琵琶山青根が嶺釋迦が岳、七十二なびき八十の窟、是れ皆順逆二つの通路なるべし、產は頭巾ぼらの貝火打塗物紙漆葛榧たばこ釣瓶酢柿木の子籠細工木鉢材木山折敷、さくらは吉野に名だかく、よし野は櫻にて名を擧たり、麓より奥の院まで、左右の山々、前後の谷々、たゞ雲を攀上り、たゝ雲を下るがごとし、海嶽の吹だめには、落花の波をあげ、木の間の嵐は寒からぬ雪をふらす、麓はゝやく、奥はおそし、開花山の淺深によれり、春この山にのぼり、いづれか花の盛ならぬ所はあらじ、夫櫻の名目は、伊勢櫻、江戸ざくら、火ざくら、樺左九良、うば櫻は葉のなきをいひ、しは竈とは濱に咲と云ふことにや、熊坂といひ、楊貴妃といふ、世に色よき杜若は、八橋と名付、よく垂るゝ萩を宮城野と號す、さればむかしよりたゝ、さくらの名に吉野といへる花を聞かず、たゝよし野ともさくらとも、理屈をつけぬこそ高みなれ。

●詩歌俳諧辯

一士あり、火燵壇上に俳摩をとつて、諸生に示して曰く、泰平聲振つて風雅四海に波わ

くこと久し、中にも俳道の一流あらゆる國境に入わたりて、村童野老も干者をながし鍬杖を杩さむとす、しかれども、詩歌の高みに涼み居て、古人よばゝりする聲は、にがゝしく彈指していへり、渠がことなんぞこゝろざしを養ひ、道におもむく便ならむや、ひとへに滑稽の雜口虚言にして、俗中の俗なるものなりと、今我一辯を出して、銘々の境をあらため、道々のをし及ぶべき所を判斷すべし、まづ和歌の事たること、誰かあふがざらん、上つ代より傳來て、人の心を種とする言葉、其誠より責めらるれば、鬼もあら男も頂をたるゝ正道なり、其樣體たとへば、雲の上人の衣冠つやゝかに、帶笏けだかうして、轅の中にいそがるがごとし、青侍白丁はなゝしく警よそほひ、住吉玉津島と氣色うふひ、あるひはよし野はつ瀨の遊山めきたり、たまゝには富士淺間須磨明石の逆旅に浦のとま屋の夕暮までは、ながめ盡しぬれど、さすがに蛸壺の底さし覗きて、あはれしるにたよりなく、小鰕まじりに、竈馬鳴蜑のやには腰かくべき褥もみえず、まして野くれ山くれのはしゝ、牛道鹿道猿すべりの邊は、名を聞くにも及ばず、これその

位高く官高きが故に、下に臨める風景捨つる物おほしといふべし、詩はゝなはだ無碍自在にして、志のおもむくところ、辭の隨はざるはなし、其飛行のすみやかなるありさま、かの名におふ八匹の駿馬をまるめ合せて飼にかゝふたるが如し、手綱すれば盤面にしゞまり、鞭すれば四方八極時の間なり、況んやそのかみの風流、山を見てうしろひきに跨り、句を錬て手悶をなしぬ、鞍の上疊勝りにして、前後左右かけ障おし、嗚呼快なる哉〳〵、如何せん今こゝに乘物の多くは桃尻なることを、俳諧のかたちたるや、簑笠竹杖草鞋しめつけて、朝立したるがごとし、京田舍去り嫌ひせず、一所にあなまどひせず、雪の市中に押され、陽炎の芝原にこけたり、あるは山赤の小料理になぐさみ、士亭に逗留をあかれたるも、一段の笑なるをや、月ほとゝぎすの曉を、木の根岩ばなに寢覺てまた見ぬ方に歩をすゝむ、はて限りなき津々浦々、薩摩潟蝦夷が千島の門背戸までもさらはいへ殘すものあるかは、是れ我道の廣みにして、我あそび所といふべし、氣のむく所目のれよぶだけ、風よや〳〵と募て、おぼえずきをうちけれど、從者は例の茶に倦して、火

の氣をうち消し、勝手は夜半のしぐれじみけり。

●贈新道心辭

世を遁れて道を求むるほどの人は、皆一かどの志を發して、まことしきつとめともしわへれど、年を重ねぬれば、又彼是にひかるゝ緣おほく、事しげくなりて、更にはじめの人とも覺えぬ振舞のみぞ多かる、古人も此事を誡めて、出家は出家以後の出家を遂ぐべうよし勸め勵ましぬ、魯九子は、美濃の國蜂屋の山里に遊びて、未だ盛なる齡の、いかなる緣にや、俄に墨の袂に染めかへて、塵のすみかをかけ出で、山寺にかきこもれるよし、傳へ聞はべりて、今の志のたゞしきに、猶後の出家をねこたらぬみさをのほどを願ひて、つたなき辭を申しおくりぬ。

蚊屋を出て又障子あり夏の月

●六玉川前賛

唐の秦太虛が心地なやみける折ふし、王摩詰が畫ける輞川の圖を贈るものあり、やがて

かたへの人をして、枕もとよりさらゝとひらき出せる氣しき、山深く里はのかに、松青み水さゝやかにて、さしむかえる心地えもいはれず、そのさゝ王維が手をたづさへて、直に其風水に遊ぶが如く、病もまた洗ふが如くなり侍るとかや、爰に洛下の風士百丸の家に、六玉川の圖ありて、古の歌人よりはじめ、近き世のたちめぐれる官士幽人の麗詞をも、一軸にあつめて書きつらねぬ、其もてあそび、泉石の思を磨きて、煙霞の眸を高うするなるべし、去りし頃草庵にこれを贈りて、我を此書中に游ばしめ、彼の風景に一句を諷はむことをすゝむ、野僧は常に物くさの病かちにて、遊方行脚の杖をひかざれば、六の川瀨の其一をだに、終に汲み見たることなし、何いふべしとも覺へねども、竹窓のさびしきに一卷を押ひらけば、その山吹の黃玉を碎く白波、卯の花のおしからみたる一里、さらし臼の杵投捨てしさびしさ、萩に照そふ月影の幽かる、汐風に啼きからしたる千鳥の聲々も、高野の奥の谷蔭まで、さらゝかに思ひやらるゝけしき、とこそかくそと興じぬれば、一擧万里の志をすく立、そゞろに見ぬ國のためしまで、思ひつゝけたる

いとゆかし、それが中にも野路の玉川は、我あたりちかき境あれば、まめやかに思ひとりて、是等の逸人に事とひぬれば、此流がつきてさだかならず、その海道に狼川といふめるあり、其西に流れたるをこそ、玉川とは聞つたへたれど、十とせあまりの先か、膳所の住人に、本間氏目端といへる翁あり、その所の名に立寄て、萩を多く植置きはべるとかや、げにも朝變暮化の世に、山傾き谷埋まれるその所ろも少なからず、境はたゞ風致の人によりて、いさぎよき水雲の跡をもまきかへしたらん、今は一卷の玉川の水に、幾人の吟腸をか養ひてん、かの名にしおふ菊水に劣らじかし。

●盃銘

花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは、酒は晝十夜八ならんをや。

我事と泥鰌のにげし根芹かな　黒みけり沖の時雨のゆき處

うづくまる藥鑵の下の寒さかな　雨乞の雨氣てわがる借着かな

欠

たり、借錢の利に利をかさぬ、やう〳〵盛も過ぎたる頃、生前の本望を遂げて、幽なる住居に、朝夕の煙を立てゝも、猶物ずき風流の細みに富めり、子さへなくて夏冬の寢覺もすやし、待つこともなくて世をしづかにいとなみ、同穴のかたらひをなせる人には似たり。

紅梅といふ花は、一度彼岸參の心を動かし、未開紅の光をはなちぬれども、やがて苦くだけ、花ひらけてより日々に衰へ、雨風を帶び夕日に　らけて、つぼめる艶を失ふ、たとへば三十過たる野郎の大躍につらなり、心ならず風流をつくりたる心地ぞする。

櫻は全盛の傾城なり、天晴常風にうちこみたる風俗、行末明日のたくはへの一點もなき花なり。

海棠は同じく時を得たる野老の、大夫と仰がれ勢もさかんに、世の中猛とのゝしれども、質素にしてうるはひ少なし、誠に香のなき一色の欠けたる心地こそ、實に本意なけれ。

欠

梨花は本妻の傍に侍る妾のごとし、よろづ物思ひに打しづみ、常に人の下に立てるがごとし。

椿はたゝありの人の本妻とむかへたるが、端手なる風俗をも似せず、ありがゝりと家を治め、身を修めるをもとゝし侍れども、さすが女色あれば、うす化粧に紅粉を絶へさぬ身持のよき花なり。

桃は元來いやしき木ぶりにて、梅櫻の物好風流なる氣色も見えず、たとへば下司の子の俄に化粧し、一戚を着飾りて出たるがごとし、爛熳と咲みだれたる中にも、首筋小耳のあたりに產毛のふかき所ありていやし。

藤は執心の深き花なり、いかなる恨みをか下に持ちけむ、いとおぼつかなし。

山吹の清げなる、眉目容すぐれ鼻筋おしとほり、襟まはり奇麗に生れつき、たゝ透融なんどいへるばかりにて、さして命をかけてと思はざるたぐひこそ、女の本意とはいふまじけれ。

長春薔薇のたぐひは、紅白うつくしく粧ひたるには似たれど、元來いやしき花の、殊にさかり久しきこそうたてけれ、たとへば總嫁といへる辻君の、日の暮るゝを待ち兼ね、世上に徘徊し、物ごゝろ覺へてより、其ながれを立てゝ、五十に近き頃まで振袖を着し、始もなく終りもなきこそうるさけれ。

牡丹は寵愛、時をえたる妾の天下にはゞかれる心なげに打ほこり、常は嫉妬我執のいかり深くして、青天にむかつて吐息を吐きたる風情に似たり。

芍藥といふ花は、いまだ嫁せざる娘の、よはひも二八にあまりたるが、ねよげに見ゆる心地ぞする。

罌粟は眉目容すぐれ髪ながく、常は西施が鏡を愛して粧臺にねむり、後世なんどのことは、露ばかり心にかけぬ身の、一念のうらみによりて、ごそと剃こぼちて尼になりたるこそ、肝つぶるゝわざなれ。

杜若はのぶとき花なり、うつくしき女のぬすみして、耻をしらぬに似たり。

あやめは、小づくりある女の、目をやめる心地ぞする。
百合花は數品おほし、笹ゆり、博多ゆり、鬼ゆり、色は異なれども、元來一種にして生得いやしき花なり、たとへば輿車にのれる位なければ、かゝえ帶つよくからばあげ、上づりに脛たかくあゆみ出でたる女に似たり。
姫百合は十二三ばかりなる娘の、後に帶うつくしく結びたるがごとし。
合歡の花のねふけなるは、深閨の中縫物をかゝえ晝眠る女に似たり、過ぎにし夜半のいかなることかありて、かくはねふりけむ、いとおぼつかなし。
其下に晝顏の目を覺したるは、二十にちかき比まで男女をしらぬ女の、はじめて宮づかへに出たる比の、よろづつきなきありさまならんか。
紫陽花の花は色白に肥ふとりたるが、近くよりて見れば、白病瘡のあとのすきまもなくて興さめてやみぬ。
蓮はうつくしき所すくなし、たとへば上手の繪にかける天人の顏にひとし、どこやら佛

めきて心こうおかるれ。
卯の花第一名目よし、時鳥の來べき比は、必ず咲くと覺えたることおかしけれ、うつ木の花といふ人は無下のことなり、卯の花月夜の夕すゝみに、しろめなる衣裳に黑き帶しなしたる女の、ふとうちつれたるが、行違ふほどもなく立わかれて、顏のほどもおぼつかなく見かへせば、はや尻影ばかりを見送りたる心地ぞする、何方へか通ふらんといとなつかし。
朝顏の盛すくなきは、よき女の常は病がちに打なやみ、土用入專のかはる〳〵隙なきにうちふし、一月の月數も二十日はかしらかたげ引込みたるが、たま〳〵空晴きり朝日さし出たるに、心地よげに打よそほひ、衣裳などあらためてほのめき出たるに似たり。
鷄頭は和のなき花なり、よからぬ女の一筋に貞女を立てたるがごとし。
らにの花は蝶の羽にたきものすと、先師の腸より搜り出し侍ること、其佳人の面影もなつかしければ、これにさきをこされて口をとぢていはず。

鳳仙花と云ふ花は、是もはげ〳〵しく紅粉鐵漿をよそほひ、人の目を驚かすやうなれども、まに携さへて見るべきものにならず、木ぶり葉つきのいやしきことは、彼の出女の李喰ふ口もとには似たり。

女郎花はいにしへより女にたとへ、我おちにきと法師の破戒によめるは、女郎の二字になづめるならんか、初秋の風によろめき立てるも、氣にさきをかけられたらむは、手柄やすくならんと思へる、物ずきこそやさしけれ、此女郎花といへるもの、花にしてはちと請取がたし、たとへば聲のうつくしきをえらびて、小歌を習はせ、髪をおろして是を比丘尼といふなり、大率は女色にしてかざりなければ、大象をつゐぐべき執心のきづなもなし、さればとて男女のかたづまりたるたぐひにもならで、男女の中にたつる風俗なり、此花百花に類する姿なし、古人蒸菓のごとしといへるは、果實のたぐひに比すべきか、莖も花もひとしく黄にして、下葉すくなによろめきたるは、かの比丘尼のたぐひとやみむ。

桔梗は其色に目を取られたり、野草の中におもひがけず咲出たるは、田家の草の戸によみき娘見たる心地ぞこそする。

萩はやさしき花あり、さして手にとりて愛すべき姿はすくなけれど、萩といへる名目にて人の心を動かし侍る、たとへば地下の女の、よく歌よむと聞つたへたる、なつかしさには似たり。

菊の隱逸なるは、和漢ともに名にたちたる花なれば、あらためては言ひがたし、風流物ずき目立ちたることを嫌へるは、よき女のをつとなぞにれくれて、閑ある片はづれに立ちしのび、よはひもまだ三十になるやならずの盛なれば、さすがに髪なぞおろすべくもあらず、たゞ一人あるおさなきものにひかれて、心ならず世の中に住みわびたるを、はづかしと思へる人には似たり。

寒菊の霜をいたゞき、雪をかつげる中に、忽然と精骨を盡したるは、天地造化のおこなはれざる所はなしと感せり、たとへば越路の里のはてにても、三國金澤富山高岡あぞい

へる所々に、おもひかけず風流のある心地こそする。

冬牡丹のしやれすぎたる、たとへば大津伏見なぞ、分内狭き所の遊女町、工商の家、軒をならべ打まじりたれば、白地のむすめども、傾國の風を見習ひ、養父入生身魂の里がへりにしやれもつくし、只管遊女の立振舞に似たれば、兩親いかばかりかも悲しと制しつらむ、時と所を知らざるは、大きなるいき過ならむ。

常世の人の花過、古人の實過ぎたる、嗚呼いづれの時か花實兼備の世あらん、或人問云く、當時人情の花にうつり、鳥に心を動かし易きは、ことく〳〵く此文章につきて、始めて人の耳目を動かし侍る、今先生が歎くところの俳諧の實はいかなることをいふにかあらん、おぼつかなし、はやくこれを明にし、俳諧の大道に悟入させよ、答て曰く、それ實のかたちをいはむ、荔子の顔のぶつ〳〵としたる、實性の人の髭元よりくるしく、もしあつき題の歌よまむと思はゞ、はやく此もとに立ちよるべし、姫瓜の丸顔はごんちや風の俤あり、ひさごの青ぎめたる、熟柿のあから顔、下戸上戸はふるくして、今樣は是をとらず、日やけの梨のじやくれたる座當のあたまこそ、俳諧の實には窮り侍る。

●紫芝岡賛

靈芝の產たる事、王者仁慈ある時は必ず生ずと、泰平長久の時を知りけるいとめでたし、されど聖代になはし〳〵と待ちけむ心長さよ、さる心なぶさにては、ふと打忘れたる代もありけむかし、又地靈なれば生ずともいへり、ある書にいはく東坡夢に人家にあそぶ、堂西に小園あり、古井の石上に石芝あり、上に紫藤を生ず、折て喰ふ味ひ鷄蘇のごとし、予が五老井の上に草字藤あり、其西に紫芝岡あり、されば坡翁が夢は、余が五老の地なること明かなり、戯に賞して曰く、

靈芝よ、靈芝よ
田夫の孫の手となることなかれ、
禪僧の如意となることなかれ。

我きく、いにしへの韓氏は、楚にあつてはわづか執戟郎にいやしといへども、漢につか

へては、元帥にのぼつて、終に大漢をおこす、器物もまた同じ、我朝とゝやといふ名物の茶碗は、魚店何がしが猫の飯器たるを、達人取て萬貫の道具となせり、これ用ゐらるゝと用ゐられざるとなり、あなかしこ〳〵、証文の出しおくれ、出損になることなかれ。

●風俗文選自序

文は貫道の器なり、孔子も餘力あらばこれを學べといへり、吾朝往昔のむかしより、大和詞の文筆、庫にみち車にみてむ、されど世におこなはるゝ言葉、多くは女官の筆にして、源氏狹衣のたぐひ、男女の中をつくし、實は歌よます道びきなるべし、共に歌連歌の文法にして、俳諧文章の格式一言もなし、先師芭蕉翁、はじめて一格を立てゝ、氣韻生動をあらはせり、たとひ鄙言漢字をまじえたりとも、心は吉野龍田の花紅葉をうらやみ、和歌の浦に志をよせて、難波津の細きよしあしをたどりしるべし、縱横自在を盡したりとも、ひとつの趣意をたつるところなくては、童蒙の丸い物づくしに落ちて、果は松坂を仕舞となせる、甚だ無下の事なるべし、今こゝにあらはす文章、體は二十、文は一百一十有餘篇、皆俳諧文章たり、これをよみこれを學びて此内に入るべしとて、弟子五老井許六撰み集めて、寶永二乙酉歳、自序して風俗文選とは云爾。

●飲食色欲箴

善は常あり、惡は變なり、惡出て後善あらはる、善惡にまよはぬ人は、其善惡になづまぬ人なり、食は禮より重く、色は民とゝもにせよとかや、されど食の命をやしなひ、色のあはれをしれる功もなづむ心より、やがて大病を生ぜり、色は三教ともにくむこと甚だしき故に、甚だ制せられず、和朝歌道のをしへの高きことは、戀を第一とす、色は風雅なり、風雅は仁あり、惻隱の心あり、大舜の二女に嫁し給へるも、今日おして見るときは、是畜生なり、かのながれを汲むやからは、これらをもよしとなづめり、元來畜生兄弟姉妹と嫁することをせずば、人倫は姉妹と嫁することを道とやいはむか、彼教には、後なきを不孝の第一とたてゝ、孝を五倫のはじめにおけり、若し周公孔子天性精の虛したる人ならば止なけむ、第一の道教は缺かぬべし、是とても聖人のまつたきといふべきか、

傑紂が極惡も、子あればこれ孝子なり、子なき君子にはまし侍らんか。
吾朝いづれの御時よりか、西域の敎をひろめり、此敎は後なきを第一とせり、其ながれをたつるもの世に多し、大路をゆく人も、十が三四は是あり、神の道に合して之を兩部と云へり、扶桑東夷の情をよくしり、かつ小國の分量をよくさとせり、地の狹く人の過たる國なり、彼やからの人々、後なきを不孝とし、鼠の子を產捨侍らば、程なく富士山もこぼちいられ、湖もいよ〳〵鹿飛を切ぬく沙汰に及ばむ、堂塔に金銀をちりばめ、法事法席に美を盡すといふとも、其費は國一にとゞまりて、他の處へはもれず、多くの眷族の喰ひつぶし侍らんよりは、いとめでたし、佛供といへるものは、そなへたるばかりにて曾てへらず、是日の下建立の源ならんか、こゝをきれかしこをたて子孫あらせじと思ふなりとのたまひて、一人の罪人となり給ふ御心こそあり難けれ、しかはあれども、此頃は僧のかくし子といへるものあれば、少しはもぞかる。
温飽は汁をはめられ、蕎麥切はからみに威をとられり、奈良茶は跡一盃を茶につけらるれども、其號を持てり、飲食器物共にすぐれたる極品のものは、賓客のもてなしとせるにたばこばかりは、亭主を奔走せり、客人たばこはへらぬを調法とせるは何ぞや。
餅は心地よき物、酒はうれしき物、茶はさびしきもの、とちくひは酒をのまず、酒好は饅頭をくはず、是天の自然か、たま〳〵上戸に嫌ひある生れつきあるは、牙あるもの、角をいたゞきたる類とやいはむ。
傾城の色は、晉子が見届けていひふるしたれども、遊君の情は下品にこそおかしきことはあれとて、木導は出女の上を盡せり、よき遊女のきぬ〳〵のうつり香は、小ぬか袋の匂ひかとおもはる、やす傾城のにはひは、郡內島のうつり香ならん、追込辻君のたゞひにはい曾てさだまらず。
隱居の妾はどうらやましからぬものはあらじ、さだまれる名さへいはれず、若きをも祖母〳〵といはれつるこそうたてけれ、色欲におぼれて飽くまで淫するものは、男女に上下のたがひありて、高家富貴の人の妻は、七人半のあてがひといへるも、男子の德と

おぼえり、たとひ七人が十人ありといはれたりとも、いやとはいふまじきに、半とかぎりたるはしたの妻こそ、ねぼつかなけれ。

雪駄の男、鼻紙の知音とさだめて、いくたりの妻をかさね侍るは、下女やはしたの上の奢なりけり、筑摩の祭の跡たえておこなはれざるかは、かれらが爲には、大きなる仕合ならん、かゝる淫樂の世となり行くも、神道のおとろへたる神のとがめとやいふべき。

鮟鱇河豚と云ふ魚あり、かたちも大きにうまれつきてあくまで肉をくはれながら、汁を吸はるゝを手柄にいはれけるこそ大きなる損なれ。

鯛は魚の最上とほめられながら、鼻屎にて釣られしためしもありや、いと口をし

鰯といふものは、魚類の下品にいひなされて、いやしきものゝ、添物となるのみあらず、田畠のこやしとなるこそ、猶くちをしけれ、しかれども正月のことぶきに引出されて、上臈のまじはりをするを自慢顔なり、されどもかしらばかりをはやされ、獄門のごとくにありて、口々にさゝれ、果は箒の先にかゝりて行方しらず、成行けるも猶々口をしゝ

かながしらといふ魚は、あたまがちのみにて、くふべき所すくなし、彼かしらのかたき所に手柄ありて、產屋のことぶきにはかしづかれて出る、惟然坊がつぶりのやはらかなるは、かれにもによかし。

魚鳥の匂ひをもてなさるゝは、むしり喰れながらも本意とやはおもふらん。

鶴は芹の香の俤を殘し、雉子はむかしなつかしきにほひをとゞめり、疲せて小兵とはいへども、雲雀のいきりもの、水無月の鶴雁とはこりける。

生海鼠といふものゝ匂ひは、たゝふべきものなし、牛蒡の香にかよひておかし、松茸のふん〳〵たる物に、毎度柚の相客に出らるゝ類ひ。

燒蛤の馨しきには、胡椒の粉の鼻に入りたるがうれし、かばやきの匂ひ風流にはあらねども、うまき匂ひとやいはむ。

ある法師の茄子のしぎ燒をほめられければ、傍らの俗人鳴の茄子やきも又よしとかへしける。

時を感ずるといへるは、かけ菜に打大根汁の青めきたるもあるに、つまみ菜に唐がらしの青くさきは、初秋のあはれをすゝめり。

芹蕗のたうを、春の景物に撰置くは無念なり、定家の卿冬の花に梅をよみたまふ、いとよし。

鰤は節振舞をかざりとし、鯖は生身玉を終にとれり。

さんちやは、四つとき、出女は八つを威勢の盛といふべし、わが翁色と義の道をしめし玉へる詞に云ふ、

色をおもふ事はうどんを見るが如く、義を守るものは唐辛のからきに類せよと。

山葵、生姜、蓼、からし、山椒の辛き類も、各その場所を得たり、海鼠腸といへるものには、わさびの打なかりたるからみをすり込み、昆布に巻込まるゝときは、山椒の手柄を見せたり、鯉のこつけの清げに、飯鮨のおぼつかなき味をもてる。

色はおもひのまゝならぬを、命とはよめり、あはぬをかこち、逢夜の鳥をうらみ、待宵の鐘に、戀の情をつくせり、湯殿柴部家のせは〳〵しきかざりに、百とせのよはひをのべたる心地して、さらぬ顔をつくり出でたるもをかし、せわしきことを戀のあはれと云ふとも、八坂北野の茶やものゝ振廻ほど手廻しなるはなし、燭臺を握り階子にのぼり客を迎ふるより、進退に左右の手を空しくせず、内の亭主心得て、二階口へ銚子盃さし出し、取盃あまたならべり、一三根の過ぐるを待かね、屏風ひき廻したるは、つまみくらひたる蛸や、酢貝の胸につかへたる心地やせむ。

玉子山芋は、腎の薬とばかりおぼえて、はじくひ物ならば、水をます物にしくはなしとて朝夕すゝめり、虚實ともに病となりて剋するところを知らず、古人も口よく病をいたし、其徳を敗る、口を守ることは瓶のごとくせよとはいへり、吾生は限あり、情慾はかぎりなし、色このむものは、みだりに淫せず、傾城に家をほろぼすものはあれど、腎虚をしたる人をきかず。

天は天ずき、地は地ずきにして、いづれの時おもき命あり、又は誰人頼みあつらへ、陰陽五行を以て萬物化生することをきかず、聖人天地の沙汰をおほきにはめたり、天地はほひるれぞもよろこびず、そしれぞもいからず、これ皆聖賢の理屈にして、元來天地は分別はなし、天は升ることを好み、地は下ることを好みて、四時の骨をり、晝夜の苦勞、人もやとはぬ潛上の上こそ大きなる損なれ、夫より人物山川草木鳥獸まで、おのが一筋に好み入て、外の物好は更になし、雨は雨好、風は風好、夏は暑ずき、冬は寒ずき、されぞ櫻に梅も咲かず、鶯がほとゝぎすを鳴きたるためしなし、聖人は聖人ずき、阿方はあほうずき、鬼は地獄ずき、佛は極樂ずき、人は人ずき、我は我ずきより外はなし、世に儒釋道のすき人出で位鼎の足のたてるがごとし、世々の方人ありて、我すきたる道の外なしとおもへり、五戒五常は此方より出ると思へぞ、五倫五戒の墨曲尺をはづれて、人一日のたゝぬ上は、儒佛祟敬の人聖人佛より飯一盃ふるまはれたることをきかず、たゞ士農工商の家業の外さら〳〵別に大道なし、當時儒好を見るに、敬の一字は胸中にありて外より察しがたし、たゞ坊主をにくみ佛をそしり、親兄弟身まかるとき、大きなる棺槨をこしらへ、擅那寺のやくかいとする、これより外によきことは見えず、異朝の法に地を買とりて、大國の風俗にしてふかきわづらひなきと見えたり、和國廟のために地をかひとらば、神代より日本半國は買ひとられむ、砂糖曲物にて埒すりこそ、佛家大きなる才覺なれば、いにしへより烏部船岡に葬りあまりたることをきかず、釋氏のことたる田畑もたて秋かさの、蠶飼せずして冬あたゝかなり、人間一種の建立にして、もしこの法あくば、このともがらいづれの島にかわたさむ、佛法には精進日あり、むかしは祥月一日の沙汰なり、それさへ大小のくり合、閏月の相違にて、命日の錐もみは覺束なきに、眷族あまた出來て、飯料不足を補はむため、毎月にはなりたるとや、月々齋米をやりながら、二親もたぬものなければ、一とせの内二日はのけて二十二日、魚くはぬ日こそ口をしけれ、佛法修行の人を見るにそのなす業は坊主のまねなり、成就の時と見え、くり

くりと剃髪はし、袈裟衣の仲間に入て、上品上生とおもへる時、其なり濟したるところを見れば、物も見事なる坊主なり、たま〳〵佛法をたのしみて、浮世をやすふたもたるゝ人のなきこそ本意なけれ、儒佛の最初はあたらしからむ、次第〳〵にふるくありて、聖人も佛も出たまはず、これにはいかいを加へたらば、忽ちあたらしき聖人も出で、當流の佛も出世し給はむ、むかし堯の二女をゆるしたるは、聟も舅も聖人の寄あひ、孟子蜂おぼるゝとき、さし合をくりはじめたるは、豈に孟軻の流行にあらずや、佛は功德をまけり、達磨の無功德は、いき過ながら、これ佛法のあたらしみならん、豈に當時凡家の人聖人佛になりて何の益かあらん、たゞ一家の中の聖人にて、世のたすけにはなりがたし、そのゝへ仕官は浪人のもとひ、工商農業の人は、金銀田畑をかすめとられ、道しりだけの損をして、たちまち非人乞食となり、その時例のふるみにれとし、時に合はぬとて仕舞けり、とてもなりにくき聖人佛をうらやむよりは、たゞ愚痴に金銀をたくはへ、世のため人のため施し侍らば、生聖人生佛とて、釋迦孔子より有難からん、たとへば温

飩をすく人あり、その子は蕎麥切をこのめり、蕎麥ずきは温飩をそしり、温飩方はそばきりをにくめり、日夜朝暮この論やまず、むかしより蕎とも麥とも、世の一統せざれば、蕎はそばずき、麥は麥ずき、天は天ずき、地は地ずきには極まれり、そしりておかしければ誘り、ほめてあたらしき時、褒るものは、我大道のはいかいなり。

●旅論

陰陽にしたがふ舊生は、これ皆天地の螂蛆也、鮨食に生ずる蛆は、生れながら粮に富み、口わきて夜出る鳥は、嘴にさはるをとりて、やう〳〵おのが粮とす、さればとて粮のとぼしきを歎き、俄に業をかへむ手段もなければ、木啄のつゝきまはり、蜘蛛の網を張て待つより外はなし、つら〳〵東西に奔走する旅客、粮のためにせざる人稀なり、かの中に風雅に旅する人に代て論をくはふ時、こゝに大國を領し、大軍を將て往來する人は、粮をもとむること大なれば、又其罪もはなはだ深し、又賽引の紙をたくはへ、十二灯をなつめてぬけ參する二藏三藏一錢の袖乞に滿足して五臓をやしなふ、かれとこれとを

論せば、二藏三八が上に立つことかたし、一日の糧、一月の粮、一年のかて、一生のかてもとめたくはふる神、その根ふかく、其源とほし、又馬士飛脚のやからも旅に生涯をはたす、圓位風羅のたぐひも、旅に死なむとはかりて、心のまゝにれはる、されば形の似て、志のたがふところは雲泥の論なり、我ことし衣更着のはじめより、五月の半までに旅することゝ已に四百餘里、おのが身上を論じて見るとき、大軍の將は罪重しといへども、其利益大きになかし、吾今日の一錢をも求めず、五年の米をになふて東西に漂泊すること、馬士駕籠かきの論に落て、終には並松の間に餓死せむ、さればとて鮨めしの蛆をねがひ、糞虫の粮に飽けるをうらやむにあらず。

●琵琶亭記

むかし嘉祥の頃、貞敏といふ人、三面の琵琶を唐土より傳り、猶世々に作りおかれたる樂器おほしといへども、あるは火のために燒かれ、又は田舍の土に落て、口をしき事のみ多し、こゝに名物一面ありて、終にもてあそぶ人なし、島の經政も撰短うして届きがたく、關の蟬丸も膝せまければ住所なし、柱には四つの島々をたてゝ落つべきわづらひもなく、何某が袂のそくいひもいたづらあるべし、撰面には辛崎の松をゑがき、覆手には勢田の長橋を横たへたり、二の月は出しほ入方のかがめを添へ四時のはそき絲筋を絃手にねじあげ、花さそふ山風に春の別を惜しみ、鶉なく濱の夕暮には秋のあはれをかなしむ、あけては彈じ暮れてはおさむ、倦むときは比良横川に足を打かけ、眠るときは三上伊吹に枕を高うす、此亭のあるじは誰そ、杉原氏、みづから高ぶり、これを琵琶亭と名づく、むかし伯牙がしらべも、鐘子期が耳なくては益なし、これを聞く人は誰そ、五老井の許六、力をあはせ口にまかせて記す、同じ穴の狐の寄合、犬の嗅ぎつけぬ間を重寶と見るべし。

●直指傳

百年後の人につたへて云ふ、俳諧直指の傳あり、たとひ上手の名ありとも、理屈あるは眞の直指の俳諧にはあらずと知るべし、むかし守武宗鑑より以來、興をとるものを俳諧

と名づけ、實あることは曾て知らず、先師はじめて躬恒貫之の魂を見ぬき、正風幽玄の實を得たり、道のべの木槿は馬に喰はれたるより、あら野猿簑に至つて、正風の體を慥に顯せり、俳諧中興の開山となつて、是より翁とは稱し侍りける、さればその風になびく門葉、里に滿ち巷にみてり、されど理屈の境にまよひて、直指の俳諧は一人もなし、それ理屈をはなるゝや易し、理屈をはなれたる後は趣向をはなれ、手に携ふる一物もなし、人麿のほのぼの、赤人の田子の浦の場所は、先師の俳諧にして、ふるくさいかへりたることは、たゞ百人一首の歌を見るがごとし、無爲の妙句はいひながして盡きず、跡に光明の光をはなつ、理屈の句はつまりて跡へもどる、是れかの光明をあやまり覺えて、終に理屈の境をしらず、和歌は貫之より其後俊成につたはり、連歌は宗祇宗長とつゞく今先師の俳諧、血脈相承の者を聞かず、我東に趣き、はじめて師に見ゆるとき、旅の句とはれけるに、宇津の山にて。

十團子も小粒になりぬ秋の風

と申しければ、師おどろきて いへり、汝いづれの歟によつて、愚老が流を見屆けたるやと問ふ、我は答ふ、我あら野猿簑を師とすと、吾子は俳諧の集を見るものなり、今わが腸を見ぬかれたりと云ふ、再會の日嵐蘭子に語つて曰く、われ門人の器をもとめて、俳諧をのこさむと思ふに、昨日許子に會して我望を休せり、撰集にわが魂をとゞひるとき は、後代許子がごときも亦あるべし、千歳の後も愚老が血脈は朽ちざることをしれり、其後三月盡の夜、師來りて終霄閑談して、衣更の句を望めり、我一兩句いへど未だ叶はず、師の云く、すべて世の人句のたしよをこのむ、上手はやあやうき所に居れり、されば上手の上には必ず仕損じ多し、愚老が當歳旦、

年々や猿にきせたる猿の面

はまつたく仕損じの句なりと、我問ふ、師の上にも仕損じありや、答へて云ふ、毎句あり、仕損じたるに何のくるしみかあらん、下手は仕損じを得せず、我この時はじめて眼を開きて、

人さ　に醫者の拾やころもがへ

といへば、師の云く是なり、吾子の俳諧の底は、此所にてぬけたり、俳諧に底あるものは、新古に渡りて自由を得ず、愚老が常に許子の行末を恐れて、みだりに句をいはず、諸門人油斷すべからずといへり、當時もてはやす門人の俳諧は、全く先師の流にはあらず、晋子は作をこのみて己が一風をたてたり、猶頃日の風體は俳諧の名を改め、餅とも酒とも名づけたらんに、何のたがひかあらん、東花坊はかしこきものなり、先師身まかりて後、みづから上手といはせ、師説にうときこともあるにや、虛實新古のとりちがへもあるべし、俳諧をひろむるには利ありて、俳諧の道をのこす爲には大きに害あり、他の俳諧のことは措いて論せず、其角支考は下手にてはなし、先師の口くせはよく眞似ける、芭蕉流にはあらず、芭蕉流正風體の血脈を得たるものは我なり、當時は、俳諧に醉ひて甲乙をしらず、後世は忽ちさめて善惡を定むるに遠慮なし、其遠慮なき人に正風體をしめす。

三月盡

けふ限の春の行衛や帆かけ船

四五月の卯波さ波やはと丶ぎす

欄干にのぼるや菊の影法師

初霜や鐘樓の道の沓の跡

是先師滅後の句あり、先師生前の耳をおどろかせざるも無念にして、今又一人も此句の腸を聞く人なきこそ、猶又無念のことなれ、後人芭蕉翁の血脈嗣ぐ人なしといふことなかれ、今此傳を讀んで定めて過當と云はむ、謝して曰く、過當人もなし、又過當といふ人もほどなく死せむ、これ その怒をやはらぐる處なれば、必ず見ゆるしおくべしと云ふ。

春なれや田の青苔に啼く蛙

わが跡へ鮒口立よる清水かな

看經の間を朝がほのさかり哉

はつ雪や治まる江戸の人こゝろ

●瓢　辭

男鹿なく御山里と詠じける、嵯峨野の方にかくれたる人なり、まだつり瓦の跡もきえか

ね、わり菱の系圖咄に、甲州の劔も今は菜刀一丁の身代にて、あまりさびしさに垣に瓢簞を植て、折ふしの筆次手にや、中にもしたゝか物に書付はべる。

甲にもあらで果たるふくべ哉

無名氏とは見えはべれど、身は雲水のたよりなき、浪人ひがみとぞ覺えける、かの岡に草刈るをのこ集り、此甲のにくさに、わざとかへしとはなくて。

かまきりに降參したるふくべ哉

とぞわらひける、あるじ聞つけて、陋巷に在て一瓢のたのしびは賢人の上、里の子はしるまじ、草刈の中より、其賢人くらべならば、許由はかしかましとて捨たりとのゝしる、あるじいよ〳〵勝に乘て、かゝる名物も知らず、汝等は田植の煎じ茶を入れ、たぬ物の納め所とれぼえたるこそ口をしけれ、花はむづかしき色もなくて、楊墨が志にかなひ、源氏の卷の名となり、歌人の腸にまとひたる夕顔ぞかし、そも〳〵夕顔の玉樓金殿にさがりたる由緒をしらず、たゞ喰物乏しき五條あたりに徘徊して、貧乏神の神木はこれなるべし、隱士が云く、汝宇治の物語を知らずや、答へて曰く、その拾遺の瓢も、咎なき隣人が一命をたてり、これ全く瓢の罪といはむ、かゝる目出たき瓢に何の罪かあらん、かれ佛緣ふかき故、空也上人には携へられ、鉢たゝきの祖師とはなりける、かのさゞ波や、堅田の海士が海老すくひも、佛緣の内かとぞいひける、隱士大きに打腹立て、汝のいひ分みな〳〵理屈の論なり、曾て風雅をしらず、古人生前一瓢の樂は、身の後の金よりは勝たりとはいへり、草刈が云、其樂といつは上戸の情なり、瓢の形をいはむ、腹便々と肥ふとりて口の窄きは何ぞや、せまくて餅の入らざるは下戸のなげきありと、大笑して歌つて云、滄浪の水すめらばつけて泳ぐべし、濁らば鹼を押ゆべしといひて、去つて共に物いはず。

●長雪隱解

一藝の達人は鄕童に上座をゆるされ、名字持つたる人と座席の爭ひをする、旱喰早糞は、男子の一藝とは稱しはべる、此藝多くは無風雅の人にあり、たとひ一藝はつきたり

とも、一藝一德ありて、萬德一藝にはかへがたからんか、されば甲斐の名將の分別所に定め、山といふ隱語をのこし、森蘭丸がきざみ鞘敎へたるは、信長公も藝者と見えたり、詩歌連俳の名句もこの所より產み出し、大悟十八度も此室に入て工夫を極めり、つくづくと一とせのあはれを盡して、鳴くか霜夜の蟋蟀、蔦の網目をもる月夜さで、人に心はつくめり、いにしへより朝市に隱家ありといへるは、慥に此所のことなり、世務所用の暇なき身も、しばらく閉關するときは、印纓を解きて公役を許す、いそぎ閑居に入て跡を遠ざけ、半日の寂寞を樂しまひと、尻をかゞけて走る。

何おもふ長雪隱しのぶ團扇

●智月尼　贈る

御床敷節せうそく、御無事のよし目出度存候、拙者事未だすさと無御座候、像も及延引候、此度翁も手にふれられ候、五老井の古木にて刻みまゐらせ候、兼て大なる像刻み度望御座候得共、病氣にて叶ひがたく候、猶又得御意申候、不備。

●五老井記

靈泉あり、水いたゝゆること纔に尺あまりにして、三尺の盆池より流れ出づること、潺々滔々たり、五老井と名づく、別墅をひらきて五老菴をむすぶ、主人姓は森、名は許六、みづから五老井先生と僭す、五老は余が別號なり、驛が原不知哉、川をかれて鳥籠の山南に近し、十旬の休暇をうかゞひ、半日の閑を領するところなり、遙に聞く、東江ばせをの翁、錫を坂西に趣しめ給へるの折ふし、靈泉を共に汲みて、風騷の句ひを葎の中にとゞめんとならじ、其水の淸きことは、惠山の泉脈を通じ、甘きことは蕭州の金泉にひとし、立歸る春の朝白散の藥をさげてより以後、四時の生涯を養ふことかぞふべからず、一とせの間につきて、泉をもてあそぶことは夏を主とす、霍山鳴が井盤の納凉、西上人の柳の蔭も、今この水に俤をひぬ、其德其要廣大にして、神佛の尊きをすゝしめ、且堯の

井を堀り、禹の水土をたいらげてより、四民猶おだやかならしむ、後に山あり、さゝ栗の岡と云ふ、晴にのぞみ雪に對して眺望さはまりなし、湖水の島々に江南江北の山のたゝずまゐ、日枝伊吹の嵩、比良三上の高根に眸をさく、西南の岡に千鳥が岡あり、聖德太子の御歌より犬上の名所となりぬ、杖を曳いては籬を廻り、岡にのぼる、蕨は鑿をたすけ、栗は茗粥を炊ぐ、柳巷は纔に莚三枚をまうけて膝を容め、賓主六人一座に全からず、茶碗五、枕五、筆墨の外に物なし、月に杜鵑を添へ、驛路の鈴に、里の砧を合せて秋をかおしむ、庭に箒をすてず、樹に木餌を入れず、窓前の草おのづからなり、たま〳〵畑を穿てば、狛の瓜種を求め、五色の茄子を植るといへども、山蟻のためにせゝり落さる、吁、潛居士文書に僻すること二十餘年、子膽芝瑞を師とし、楊子梅道人が骨髓を伺ふて、雪裡の芭蕉、災天の梅、自然に一味の風雅を兼むとす、世上予か筆痕を樂んで、予が心頭のたのしひをしらず、風雅は是非をあらそひ、書圖は鄕童の前にたはぶれとなる、いまだ風雅のために文書をつのしむといふことを聞かず、予とゝもに志を同じうして、はやく

吾をたすけよや〳〵、終日樹下に徘徊すれども、更に答ふるものなし、四隣の鳥聲、花間の蜂蝶のみ、笑ふて晴天に腹皷を皷し、五老の流に脚をあらふて歸る、于時元祿五年壬申春二月於馬欒樹林下濺毫。

水筋をたづねて見れば柳かな

●西　銘

つよからずつよからぬ女の風雅は、糸筋のごとく、紫五色によごれざれば、狂客の悲しみをすべても、何がしが緇塵にそまらざるよろこびを見せたり、天の香來山の衣をたち、布引の機物をはへたる糸すぢも、皆是はそみより出でたる女の手業ならむ、猶日本紀の局が、初音の卷にいひけむ、瀧のよどみの年なみより、水上としつもりて、老にけらしお黑き筋おしとは、共に雙白堂の事なるべし、其酩に曰く、

髪の花女瀧男たきのかさしかな

●斷絃文

鳥の嚶々と啼き、木の丁々とひゞく、専友をもとむるかなしみの聲あり、人はいふにたらず、子を捨て妻を捨てゝ、山林の友にまじはり、琴を斷ち金を擲つて、まことのこゝろざしをつくし、語りかたらふこそうき世のおもひ出とはいふべけれ、假初の旅寐に一夜二夜の別をさへかなしとおもふならひなるに、ある人雲井の國に貶せられ、遠きあら磯に配せらるゝわかれいたりてかなしかるべし、されど潤り江に影見ざる歎きのみにて、同じ世にすむなぐさめもあるありけり、たゞ長門の國に船を出し、廣島の方に趣く人の別は、みるめなき海士の呼聲のいなせもきかず、磯馴松のひとりさびしきに、音信るゝ便もなし、こしかた行末おもひつゞけぬる悲しさは遣方なからむ、我に方外の友あり、江東平田村光明遍照寺十四世の僧、亮隅上人字は李由、一の字は梅年、四梅廬と號す、嘗て律師に任ず、姓は豫州河野の嫡流にして、安藝の宍戸を兼合せたり、母なやむことなき深窓の女にして、藤原なりけり、僧三代我三代、あるは茶にまじりてさびを好み、又は碁に暮して勝負をよろこばず、我僧は風雅に交ること二十餘年、僧は寺を忘れ、我は家に歸ることをしらず、ひとつ蚊帳にむれ入り、同じ衾に足をつゝむ、若し孔孟の理屈人を親にもたば、生たる甲斐はあるまじといへば、老佛のいき過ぎたるを子にしたらん時、身代破滅は立所なるべしとて、是より天地をそしり初めて牡丹芍藥はひくき花なり、櫻海棠は能過たり、かれは愚痴それは鈍なりとて、果は食好の上に落て、餅蕎麥切は、急用にたゝず、終にはやみの豆腐にながれて、夜中の勝手をおびやかし、面目もなく其夜も明たり、月見、雪見、星祭、玉まつり、四梅廬の明ぼのには、烏の初音に待わび、七種の踏草には、蕗の薹をさがす、箏の斂をのぞき、瓜なすびの畑をあらす、風臺にふかれ水臺に冷し、蘆開きの次手には、歳旦句を鍛ふ、煤掃の逃所、腹汁の定舞臺、從者が無返事に空耳をつぶし、小僧が白眼も、はぎひいて通る、遲々たる春の日みじかければ、長々たる秋の夜長からず、伊勢住吉の物まうでの比も、共に奉幣をさゝげ、吉野龍田の旅寢の夜も同じ花紅葉に臥したり、三日對せざるときは、百日の思ひをなし、五日音信せざれば、三年の月日を隔つるが如し、然るにことし寶永第二乙酉の六月二十二日の夜、

例の癪氣胸隔にさしつめ、たれかれよべとばかりにて、終に息絶えぬ、親族朋友のしたしき限り、末寺諸檀の僧俗男女足を空にまどひ、國中さはぎかなしみ、四日五日はとりつゝみ物しけれど、壁生草のいつまでかはとて、終に夏野の原に送り捨て、平田山にたちのぼる一すぢの煙に、遠近の里人も今は、と思ひやるべし、後の事どもは有りがたき限り取り盡し、法中の高僧日夜の席をなさぬ、和泉なるはらからの御坊も、朝夕のまことつとむ、中陰の日數も程なくすぐれば、つゞひあつまれる人々も、おのがたさまにかゝれさりぬ、反魂の香も、招魂の袂も、共に手ぶるさ所を好まざれば、ふたゝび俤を見る人もなし、無碍堂の垂布の色も鴈來紅に時を奪はれ、五花井の待宵も、一人の席を欠きたり、つら〳〵四とせ五とせ、僧は肝腎に癪をうれへ、我は肺肝に痼を病む、平生病がちに打なやみて、朝の露によをはかなみ、夕の鐘に命をかざふ、僧と我といへることあり、我死なば僧口を閉む、僧身まならば我絃を斷たむ。思ふに蕉門のはいかいも日々におとろへ、正風の血脈も次第に絶えて、さく人もなければ、する人も猶なし、孔子の道は春秋にとゞまりて、五老井がはいかいは此文撰につさな、是より後はいかい聞の博士となるなり、僧すでに身まかりぬれば、我はたして絃を斷ちぬ。

●是非齋銘

是を是とするは諂へるに近し。
非を非とするは謗るにちかし。

羽官平日儒釋道の書をよむ、道は儒の敵となり、儒佛のむかふ座主にとれり、もし酢吸の三翁世に再生して、我俳諧の道を鹽梅せば、さはめて是非齋の遊を覗いて、箸箱の連衆に入らむと、あの方より望まむ。

●豆腐辯

むかし晝とあけ、夜と暮たる時、豆腐といふもの一丁出て、名もなく類もなく、甲もなく乙もなし、たゞうまさとばかりおぼえたるこそありがたけれ、それよ小路〳〵に出生して世々の聖賢に料理せられ、むかし豆腐は石部金吉とてすたり果て、今やうのおぼろ

めくものを、豆腐の精とはいひはやらす、猶五倫五常の獻立を作りて、是は仁なり、それは義なりと急用にとり出す、七つ入るの三つめ五つめを求に應ずるに似たり、田樂一串にも仁義は自然にありて天地をつらぬく風味は自然にもてり、折ふし數賢人あつて豆腐をあへ物にせんといへば、朱子程子の鹽から口は、これを異端寂滅と配すれども、元來聰明叡智の飛助ならでは、此行過はならず、たとへば用名介は、隣家にあたつて碓を穿てり、終日耳中に客たり、過去の聲は盡て、未來の音はひゞかず、たゞ一聲の碓にして終日一聲のからうすあり、許由むかし堯の天下を受けずなり、ひさごもかしかましとて捨たり、天下國家のたくはへは輕くして棄るにやすく、耳中のひさごの蓄へは、重うして捨るにかたし、巢父が牛を洗はざるは、元來許由が耳の汚れたるをにくむなるべし、和漢同じ耳垢等がほめしるしたるこそ口をしけれ、されは前後おきことをみづからしらば、すたりたる田舍豆腐も、開闢一丁の豆腐に異なることはなかるまじかし。

人參辯

それ人參は元氣大補の聖藥なり、唐やまとこれを寶とす、とりわき三十年來の和醫、人參なくて人を療することかたしと見えたり、邪氣濕熱陰虛火道のわかちもなく、人參〳〵には病家大きに草臥たり、およそ人參の斤兩は限あり、限なき人參つかひに買とられて、世界の人參、威を增し時を得たり、價高直にして凡夫貧僧の口に入る事かたし、產は朝鮮を最上とす、其代物立どころに魂を失ふ、醫家朝鮮の產を好まるゝは、おもきが上の小夜衣、質におくより外はなし、彼人參醫者を察し見るに、理屈人の利錢する心になるゝらへ、又は低人の價高直物にめでて、ひたすらたふとまるゝと見えたり、人參の力にてわまねく人の命をたすかるならば、邊塞醫療なき地は人種は盡くべし、たとへ死ぬるにもせよ、人參に殺さるゝものなし、人參ある國は人參にて人をたすけ、又人參にて人を殺す、生死の算用は持にして置くべし、されど大切の金銀つひへぬ方勝ならん、やまひに三つあり、人參にてたすかる病、人參にて死ぬる病、人參なくて活る病、此三の內人參なくて事欠けぬ方二つなれば、是も一つの勝なるべし、我沈痾老衰して折ふし人參

を用ゆ、唐の產朝鮮の產、其功すこしもかはることなし、醫家は人に與へて外より察し、病者は我が呑みて功を知る、たま〳〵病家に入て脉をつまみ、そこ〳〵に尋ねちらし、病見ぞはしの顏つきにて、合點〳〵で歸らるゝなり、かの人參にもり殺され、忽ちあたりたることを知らず、其功いまだとゞかずして空しくなりたるに極めぬれば、又人參のきゝたるをも、たしかには知り給ふまじと覺束なし、きくとあたるとの境目もわかれざるに、朝鮮唐の產の微細の能は知り給ふまじと、猶々おぼつかなし、我思ふに、唐より渡すところの數百方の醫書、皆唐人參にて組たる方なり、もし人參朝鮮にかぎらば其國所を記すべし、唐人何の遠慮すべき、されば川穹窮弓のたぐひも多し、それ菜菔は尾張の產を極上とす、されど大根のなき國所、なくて事の缺けたることを聞かざるがごとし、それ醫道俳諧よく相似たるべし、醫者病にむかひて方をつけ、作者前句題に臨みて趣向をよするところ、其理窟をはあれ、つくつかぬあやうき境は、上手名人の手際同じ場所あらん、當時醫をまなび、歌道を習ふ人を見るに其稽古前後なり、まづ所作を盡し

からして、猶其道に精しからん時の學文なるべし、これ古人上手の仕方なり、さるを學文より學び入て、一切理屈にてすます故、祭すぎての皆掃除なり、むかし丹溪素問を見て、四十より醫に入り、古今の聖醫と稱す、すべて醫學は狹き物ならん、道を盡し理を窮むるは、素問一部のことなり、其餘は味噌鹽の獻立にして、伊呂波寄の字盡しを引くよりも安かるべし、今の上手めく人は、毎度素問の語でかため、本草の說をつばなかす、文盲の病家平詞を信せずして、大きに漢字に驚きて上手名醫に極む、當世のやまひは文盲にて、素問本草を聞知らずして、彼の名人の御藥は曾てきかず、ある人犬の吠かゝるには、虎といふ字を書いて見すれば、たちまちにぐると習ひ置て、ある時人くひとびかゝりけるに、習の文字を書いて見すれば、其手に喰ひつかれけり、日本の犬は文盲にて、虎の字のよめぬがごとし、たゞ理屈より理屈にくひ入り、是は上を見てゐる句、これは下を見て居る句なりと、小刀刻の小細工は、皆素人に耳ちかければ、終に理屈にすゝめ入れて、理屈地獄に落すあり、されば霍亂の賣藥は、はくらん病が買ふなりとは、名人の

一言なり、百年の後もし理屈がすたらば、わが僭上の言葉も人眞となるべし。

●雨乞表

皇天にくらひしたまひてより以來、四海の民を愛で、農業おこたらず、蠶飼時をうしなふことなし、あまねく御うつくしみの彼は、八島の外までながれ、ひろき御めぐみの風は、いたらぬ里々もなかりけり、しかるにことしの夏六月、大に旱して雨一すじも降らず、千里草枯て赤地となり、百川水盡て川原となる、野老たふれふし、村翁餓つかる、牛羊唾かはき、犬馬舌こがれたり、白晝に星あらはれ、日月は赫々として赤し、龍神も岩穴に引こみ、鳴神の駒も膝を屈して立たず、土器の大豆は、忽ぢいれこがれて、水晶の芡はたちどころに火となる、白髭の鳥居は、葦原の變を感じ、鹿飛岩あらはれては勘者の勞をつくす、大堰桂の水いさかひには、鋤鍬の鋒先をあらそひ、鳥羽の田づらの古井を汲んでは釣瓶の隙もなかりけり、されば國王のまゝどありて、政たゞしく古代の風を興し、かりほの菴のあらはなるをあはれひ、寒夜のあかつきには、御衣をぬがせ給ふ、百官忠義を盡し、郡主民をなでゝはかぎりある貢物をゆるされけるに、天何のいかりかあつて、かゝるからき目見せ給ふぞ、神泉苑の祈さへしるしなくて、布留の社の名のみ空し、手を洗ふては雨をいのり、簑笠をかけては氏神をたのむ、天はやあはれみをたれて雨をほどこし給はゞ、御湯は大釜を盡し、相撲はあたらしき鼻褌をかゝせむ、猶ひなびたる笠の躍もをかしく、裝束出立はそろはずとも、借着ばかりはゆるされて、摸樣は天道次第なるべしと、庄屋肝煎謹でかくのごとし、臣悲歌の情に堪えず、拜表して以て聞す。

春立つや齒朶に止まる神矢の根
青海苔も和光の塵の一つかな
臘八や腹をさぐれば納豆汁
新藁の屋根の雫や初時雨

四五月の卯浪さ浪やほとゝぎす
今日ぎりの春の行衛や帆かけ船
苗代やうれし顏にもなく蛙
世に住めばたゝかれ暮す西瓜哉

血の附きしはな紙さむき枯野哉
かやり火の煙にそれる螢かな
唇や蓼くひし跡に秋の風
田樂や仰むく口へまひゝばり
一番にかゞしをこかす里分かな
いそがしき碓ふみのうちわ哉
卯も花にあしげの駒の夜明哉
一たひの醫師ものとはん歸り花
出代やあはれすゝむる奉加帳
看經の間を朝顔のさかり哉
春慶の膳するわたす花見かな
明月や一こゑくもる天津雁

產月の腹をかゝへて田植かな
松虫の鳴くや夜食の茶わ五器
初雪やまづ厩から消そむる
藪入にもどつてけふのおぢり哉
大髮にかみそりのとふ寒さ哉
清水の上から出たり春の月
蚊遣火にうちはあてけり秋の風
禪門の革たびおろす十夜かな
霜の後像に添ゆべき菊もおし
一竿は死裝束や土用干
灸の點干ぬ間もさむし春の風
裸身に麻の匂ひや相撲とり

初霜のおさまる人の江戸ごゝろ
芋を煮る鍋の中まで月夜かな
夕立におどりおどり出けんところてん
人さきに醫師の袷や更ころも
有明となればたび〳〵時雨哉
欄杆にのぼるや菊の影法師
出代や給仕しまふていとま乞
鬢の霜は無言の時のすがた哉
ふん取の年玉さむし洗ひ芹
櫻ちる空や越後の鳥曇り
行春やまた追わけのあぶちあげ
里の女や麥に骨をるうしろ帶
嫁入の門も過けり鉢たゝき
陽炎や壁のぬれたる夜の雨
しのばする妾に似たり梨の花
說法のあはれ過たる日の永さ
腹をさぐりて見れば納豆汁
山吹も巴もいづる田植かな
木像は殊勝すぎたり涅槃像
本箱にあるべき桐の若芽かな
うらやまし年の若さに獨活嫌ひ
龍宮の鐘がなるなり花曇り
片店は檻うりけり燕子花
かさゝきの橋や繪入の百人一首

十團子も小粒になりぬ秋の風
朝鹿の身ふるひ高し笛の椽
八朔に酢のきゝすぎし鱠かな
辻君のうれぬ野分のあした哉
名月や國侍のにわか客
あい袖で振つて見せたる尾花哉
秋の夜に寢たらぬ人の尊さよ
爐ひらきに這出し給へきりぐ〳〵す
同じ日に山三井寺の大根曳
蒟蒻に箔のつきけり御影講
出女もでかはり顔や年の暮

雷と一度に落つるふくべかな
餓鬼の飯雲もかゝるな清見寺
大名の閨にも寢たる夜寒かな
大なる家はど秋の夕べかな
十六夜や有馬を出でゝ歸る人
稻刈の其田のはしやこき處
新蕎麥や熊野につゞく吉野山
埋火や蒲團を通す茶の匂ひ
明がたや城をとりまく鴨の聲
綿帽子の粘をちからや冬の蠅

○上島鬼貫

摂津伊丹の人なり、名は治房、通稱三郎兵衛、槿花翁と號す、又仏兄、蝸々里居士、即翁等の別號あり、寛文元年生れ、元文三年閏八月歿す、年七十八、伊丹曇染寺に葬る。

六月八日中に七日の薺かな
鶯は山ほとゝぎすはかりなり
骸骨の上をよそほて花見かな
鶯か梅の小枝に糞をして
白魚や目まで白魚目は黑魚
日向にも尻のすわらぬ猫の妻
北へ出れば東へ出れば花のなんの
狀見れば江戸も降けり春の雨
人の親の烏追ひけり雀の子
猫の目のまた晝過ぎぬ春日哉
鶯や梅にとまるはむかしから
曙や麥の葉末の春の霜
花散りて又しづかなる園城寺
麥まきや妹が湯をまつ頰かぶり
たよりおや笠ぬぐ後の春の雨
懶きはおほろ烏の寢覺かな
如月の日和もよしや十五日
緑たつ岸の姫松めでたさよ
山吹は咲かで蛙は水の底
油さし油さしつゝ寢ぬ夜かな

一寸見には近きも遠し吉野山
井のもとの草葉におもきつらゝ哉
浪の底にわが足形のあるやらむ
耻かしの老に氣のつく花見哉
谷水や石も歌よむ山櫻
うたてやな櫻を見れば咲にけり
九重の狀より花のこぼれけり
花のない木による人ぞたゞならぬ
花そなら散はや夢も抱くらむ
笠とりて跡ちからなや春の雨
又もまた花にちられてうつら〳〵
春雨の降るにも思ふ思はれう

秋風の吹きわたりけり人の顔
鳥はまた口もはとけず初櫻
かけまはる夢は燒野の風の音
杖ついた人は立けり梨の花
摺鉢の花ににぎはふ庵かな
行水の捨どころなし虫のこゑ
盛なる花にも絶えぬ念佛かな
目は横に鼻は堅なり春の花
武士も見ながらちらす花の風
花の頃扇咲たり諸職人
御車は闇の月夜の啼く音哉
小夜ふけて川音たかき枕かな

によつぽりと秋の空なる富士の山
松風や四十過ぎても騷がしい
春風や三保の松原清見寺
藏に居て人には見えず白鼠
日和よし牛は野に寐て山櫻
永き日を遊び暮れたり大津馬
春と夏と手さへ引ふ更衣
木にも似ずさてもちいさき榎の實哉
津の國の玉川しれずほとゝぎす
時鳥耳すりはらふ峠かな
一日で花に久しき袷かな
人に逃げ人に馴るゝや雀の子

あるくものと知れば尊し神おくり
鹽尻は富士のやうなるものならむ
雲の峰なんぼ嵐のくづしても
花鳥に何奪はれて此うつゝ
賤の女や袋あらひの水の汁
我はまた世をかねて衣更
咲からに見るからに花の散からに
聞かぬやうに人はいふなり時鳥
春雨のけふばかりとて降にけり
桐の葉は落ちても下に廣がれり
何まよふ彼岸の入日人たかり
いかうとの花の前なりや留められぬ

蓬萊の麓へかへるねすみかな
秋もはや宇多の炭がまけふりけり
神々と春日茂りてつゝら山
夕暮は鮎の腹見る川瀬かな
五月雨にさながらわたる二王哉
撫子よ河原に足のやけるまで
夜も然ぞな明やすいとは偽と
あちらむけうしろもゆかし花の色
我か身の細うなりたや牡丹畑
遣放つ小車にとぶ螢
五月雨唯降るものと思ひけり
鳴蟬の其木にもまた居つかぬ歟

樹の中にたゞ青柳の尾長鳥
蚊をよけて親の鮒や時鳥
むか一問へば卵塔までの葉末哉
藪垣や卒都婆の間を飛ぶ螢
野の末やかりき畑を出づる月
飛鮎の底に雲行くかがれかな
此軒にあやめふくらむ水月は
葦原や豊の粽の國津風
春の水ところ〳〵に見ゆる哉
鶯や音を入れて只青い鳥
涼風やあちらむきたる亂れ髪
水無月や風に吹かれに古里へ

冬は又夏かまし丶やとひひにけり
夕立の又やいづこに下駄はかん
十月の二日も我もなかりけり
氣苦勞や馬に乘るもの小田原へ
我裾は三河の露とまじりけり
惜めども寢たら起たら春である
惜まじな翌日の苔となるものを
風もなき秋の彼岸の綿帽子
衣うつ京へは遠き寢覺かな
何の木と見えて雨降る今宵かな
月は此今宵にあけて何一つ
見ぬけれど月の爲には外の濱
何と今日の暑はと石の塵をふく
武藏野は堂より出づる冬の月
神の留主〳〵と思へば神の留主
田の中に棒の一本立たるは
板かけて更に見するや草の露
人間に智惠ほどわるい物はなし
水無月の汗を離るゝ佛かな
見る月とはいれぬ月の今宵かな
野も山も晝かとぞ首のだるくてそ
名月や雨戸を明てとんで出る
燈火やれのれ顏なる雨の月
豆を食ふて豆の花とも眺めはや

樅の木のすんと立たる月夜かな
又の月もあふのいてこそ効はあれ
君もさぞ空をとこらを此ゆふべ
言の葉の落穂ひるふもたのか哉
冬もまた松の木持ちてむかへけり
時雨ても雫みじかし天王寺
糸にたゞ聲のこぼるゝ時雨かな
朝日影さすや氷柱の水車
雪て富士か富士にて雪か富士の雪
世の花や餅のさかりの人の聲
此雪か降らう〳〵と師走まで
なんて秋の來たとも見えず心から

菊の香の一つをのこす匂ひかな
古寺や栗をいけたる椽の下
むかし色の底に見えつゝ花紅葉
暖かに冬の日南の寒さかな
冬枯や平等院の庭の面
遠干潟沖は白浪鴨の聲
饅喰ふて其後雪の降りにけり
節季候や臼こかして來て間が抜ける
鉢たゝき古うもならず空也より
いつも見るものとは違ふ旅の月
待雪の頭巾や耳をあけてゐる
宗因は秋死あれしか秋の塚

あとの月雨の降る時けふの月
久方や朝の夜から空の菊
木も草も世界皆花月の花
芭蕉にも思はせぶりのうこん哉
此薄窓より吹くや秋の風
涼風や虚空にみちて松の聲
乘懸や橘にほふ塀の内
戀のない身にもうれしや更衣
燈火の言葉をさがす寒さかな
我が手て我顔撫る鉢たゝき
夏菊に露をうちたる家居かな
雲枕花の氣さびる時鳥

今の心是こそ秋の秋の月
月よ今日よ去年の命に花ゞ咲
うつゝなの夜とは秋とは今ゞ嘶
今日の秋にいつ逢ふことぞ親にまで
露の玉いくつ持ちたる薄ゞや
國々を秋になつたら見に廻れ
空に鳴くや水田の底のほとゝぎす
我宿の雪のはしり穂見にぞれ
紙子着て見ぬ唐土の時鳥
雪にわらひ雨にも笑ふむかし哉
夏の日の浮んで水の底にさへ

○平野杉風

杉風は江戸小田原町の魚問なり、通稱藤左衛門又五兵衛と稱す、蓑笠、採茶庵、鶴歩等の別號あり、芭蕉の門人にして家富みたるを以て常に之を扶助せり、彼の深川に建てたる芭蕉庵の如きは、杉風の別墅内にあり、正保四年生れ、享保十七年六月十三日歿す、年八十六、築地淨勝寺に葬る。

今朝の春は李白か酒の上にあり
蓬萊を脇息のけて居けらし
きのふより若菜つむそへ蕣賣
つもれ〳〵今朝やはじめの老重ね
風の香や立枝は見えて藪の中
よし死なばその二月の月花に
大樣に春をおくるや墓
おぼろ夜に梅が香おくる風細し
桃咲や花のあり數鳥おゝし
仕着せもの皆着そろふて春の宿
にき〳〵と千石萬石としの暮
花いつれ精進日には白き梅
けさの若菜人影もなし野は入日
紅梅は娘すゝする妻戸かな
紅梅やけふは涅槃に香をさゝげ
白桃は節句の跡のさかり哉
さえ〳〵て梅に氣のすむ月夜哉
櫻や咲き瓢箪出てゝ勇む駒
待花に小寒い雨のあしたかな
このもしや花の中なる柴の菴
散りしあと咲かぬ先こそ花戀し
卯の花に五月も月の定まらず
かゞふるや老の仕事にほとゝぎす
なりそめるさゝけかつらの園の垣
十用干久しきものや珍らしき
七夕にかさねはうとし絹合羽
天の川色繪の扇ながさはし
川添の畑をありく月見哉
玉川の水におぼれて女郎花
名月や木末の鳥の晝の聲
けさは雪雨になりしか春のとか
花くもり心の隈をとりけらし
子規まつや柳の小くらがり
澤潟はとりのこされしかきつばた
啞蟬の啼かぬ梢もあはれなり
おもかけの蓮の露にうつれかし
かつくりと抜そむる齒や秋の風
女郎花賤が歌にはおかた草
蓼の色花のかたみや女郎花
月更けて雁は寐言の相手かな
月今宵出てたる山に名はなきか
待かねて三日月見るか屋形舟

いざよひや我身にしれと月の缺
いかにしても寐耳に鹿の不便なり
いざよひも更けて人無し老か友
殘多し後其後の月十四日
松茸や峰は是非なし足の下
雪に赤さもの道行く人の鼻の先
上下の枝ひきしめし枯かつら
髭そらぬ身はならはしの寒さ哉
世の中に宿るものなし散る木の葉
年今宵こゆるや人の老の坂
細工笹世々の時雨に殘るかな
とぼ〳〵と日は入切つて梅の花

立寄りて柳に頭痛さすらせつ
けふ星の名におふ花や女郎花
居並びて手をただおかぬ扇かな
涼まむと月夜になればされありく
成佛の花の色香や夏の藤
見る影も冷ゆく月のしまり哉
朝顔は二人ながめてあしさ哉
灯を細め寢つけばひゞく碪かな
老かさね枯木に咲くや花一つ
はなやかに日向の梅の花厚し
水ふきしむめや齡の長からむ
若草にあれたる駒ぞあらけあき

影ふた夜たらぬほど見る月見哉
菊畑奥ある霧のくもりかな
門の畑夜のしをりや蕎麥の花
刈なから咄は稻の實入かな
しぐれつゝ雲にわたれる入日哉
山下や牛にもはこふしくれ水
初雪やふところ子にも見する母
覺悟して風引にゆく雪見かな
身にそまる年をやられば銀添へむ
月雪もふるき枕に年くれぬ
冬籠目のくたびれる明り窓
元日や花咲く春は屠蘇の酒

山の井や墨のたもとに汲む蛙
野の露によこれし足をあらひけり
畠見にむせるばかりや草の息
夏かけて軒になれたる燕かな
萩うゑて獨見習ふ山路かな
朝顔や蚊屋の内から障子あけ
名月や軒もる雨の音淋し
手をかけて折らてしさりし花木槿
紙衣着て梅手折りぬる人のあり
みちのくのけふ關越えむ箱の海老
長生の思案してかす柳かな
これもその千代の白玉花椿

かびのつく餅わる頃のつはき哉
酒によしことぶきによし桃の花
子や待たむあまり雲雀の高あがり
何の木も霞みて煙る小ぬか雨
待花に小寒い雨のあしたかな
めつらしや内で花見のはつめしか
影うつる松の緑や藤の花
袴着て出れば空にほとゝぎす
卯の花にはつと目ばゆき寝起哉
なりそめるさゝけかつらの園の垣
飛ぶ螢さえて心の行止り
梅ちかき庇柱やもたれもの

千代といふ鶴にも雛の道具にて
さえ〳〵て梅に氣のすむ月夜哉
何かとまれ花のあとなる桃の花
おぼろ夜に梅か香おくる風細し
眞磯峯も見落す谷も花
振上る鍬の光りや春の野ら
常盤木のならびて榮ふ若葉哉
ほとゝぎす寝巻解く間に影もなし
かきつばた花ある中は降れ曇れ
撫子をうつ白雨やさもあらき
きのふけふ音にきこゆる春の水
きのふけさ足の早さよ若菜賣

柳見よ藏のあと先くり返し
鶴龜もかきりやあらむ星の戀
朝顔にほのかに殘る寝酒哉
白う黑う月見る顔も晴れ曇り
音やめば月見に出るや後の月
水飲てあとに秋しる咳一つ
後の月星も宿かる菊畠
初しぐれまた朝顔の花ひとつ

○各務支考

支考は美濃の人なり、東華坊、西華坊、獄子菴、盤子、見龍、萬寸、饅丁、虚乙子、是佛坊、華表人、梅花佛、桃花仙等の別號あり、寛文五年生れ、享保十六年二月七日歿す、年六十七。

●四郎五郎の傳

筑紫に四郎五郎といふものあり、其性は小麥の餅あり、明暮これに馴れたる人は、たゞ

五郎四ともいふなり、此もの野畠の間に生じて、肌おろそかに色黒し、しかれども菓子屋の手にわたりて、百練千鍛すれば、あるひは饅頭のはだやはらかに、かすてらの味ひありて、ほとんど僧をおどさんとす、むかし志賀寺法師の容こそ痩たれ、心は花の都人を戀そめて、玉の緒の歌はよみ給へり、まして其名も三輪の小本に住て、葛城の神の畫のかたちにもはづることなし、されば心くだり、姿いやしきだに、色はすつまじき世なりけり、五郎四何にか詫しからんとあるつらの人は、衣食の價をむさぼらず、酒肆婬坊の眼高しと、人の人にもてはやされて、心の外に見ぐるしうやつれ、座上にありて風をひねる、さばかり捨はてたる世ならば、石上樹下のすまねこそあるべけれ、しのぶ山の關路もこゆる人のあはれはこそあれ、戀せじ酒のまじとは、誰にかかためるぞや、先師曰色を思ふこと、温飩のごとくせよと、汝をよろこぶもの日夜に愛せず、汝をにくむもの絶て嫌ふことなし、しからば物のほどをいへ、るなるべし、汝が本性はいやしからねど、おほくは賤の女の杓子にかゝりて、ありかたき生涯をあやまる、されど世をてらひ、

人にこびて身をかざらむとする人には、おのづからまさりもすべし、此さかひは汝五郎四がしる處にもあるまじ、何晏がおしろいせぬ顔も一世の願ひにはあらず、兵部卿の宮のかりのにはひも、また化ありと知るべし、世はたゞ世にしたがひて、眼前のたのしひをたのしむべき事なり。

夕顔に鏡見せばや五郎四郎

●牧童傳

牧童はもと小松の素生にして、賀の金城に居ること年久し、家は硎刀の業をもて、世のつねのたつきとはなせりけり、牧童は彼が兄にして、北枝はこれが弟なり、もとより謝公が才能を爭はざれば、曾て阮家の富貴をも羨まず、たゞ同胞のあはれみ、おのづから世の人の鏡ともいふなりけり、むかしは梅翁の風流をしたひ、中比は芭蕉の門に入て、時の風雅に遊べる心の、ふたりともに遊ぶところ同じからず、たとへば一巣においたちぬる鳥の、彼は梅の花の清きに囀り、是は卯の花の曇れるに遊ぶ、あそぶところの

同じからずといふは、樂む心の異なればならし、砥取の山の時鳥も、けふはとぎそと啼渡れば、夜を梟のあそび數寄となりて、吟席交會此人を知らずといふ人あし、時に居眠りをもて生涯の得物とせり、ある時は欄干の花にそむき、或時は檐外の鳥を聞きながら、眠り來り眠り去つて、四十年の春秋も過行きぬれば、貴介もこれを忘れ、高明もこれをゆるし給へば、終に兜卒の内院にも高く眠らんとそたかぶりける、湖南翁曾てある法師に問ひて、牧童はよきものなりと申されしよし、よくてあしからんや、あしくてよからんや、其翁ならずば知らじかし、然らば生天は先なるべくとも、成佛は後ならんと、むかしの人の心も、人はふたりの人に似てや侍らん、牧童常にいへりけり、我むかし芭蕉の翁に見えて、武の素子堂が、

浮葉卷葉この蓮風情過たらん

といふ句の物詰に及ぶ、此句は此蓮と聲にとなへたるがよしと敎へ玉へりし外は、別に何事も覺え侍らずと、時の人これを評して、げに人は人のならひありて、さらぬみなもともたどりたるやうに、およづけいふらん、かくたゞありの人は世にたふとしと、されば世の中の老の坂越たらん其人は、飢寒の間におきて、風雅もやゝあやうからずといふべし。

東花坊贊して曰、むかし人は、恒の產なければ、恒の心なしとて、つれ〴〵の法師だに安倍野のあたりに花むしろ織りて、都のつてには賣りもせられしか、まして世にある人此あらば、硎刀の業のみいと清げなり、かくする物の中にも、かの居眠のさむまじくば、物と我とを忘れたりとやいふべき、物其我をや忘れけむ、我其物をや忘れけむ、眠るに時もなく覺るに又時もなし、何がし和尙の虎によりて居眠りたらん、世におこがましく見られがまし、ある上人は目のさめたらん時、俳諧せよとも仰せられしが、扨俳諧は人の心にすなじきや、唯我心にすなりけり、然れども人の面白からずば、我もおもしろからず、此境を知りてこそ、俳諧はすなりけり、さりや俳諧は人の心を和らげて、花に啼く鳥の花ならずしてからばしといへる、世のまじはりの媒と

ならば、かの鶺鴒のはちからも、などや一巣のよしみなからん、俳諧はたゞ戯れなり、はいかいにはあそぶべし、世に戯れ世に遊ぶときは、草刈笛の世に忘れて、牧童の名もをしむまじけれ、所謂素子堂が一蓮のちぎりあらば、其の時の翁の心に遊びて、今も一字の師の影をも蹈まざれとなり。

●獅子菴記

獅子菴の三字はいづれの意ありて、いづれの所にありといふを知らず、しからば莊周が世をさみしたる何有の鄉のほとりにやあらん、或ひは栴檀の林にかくれて、勇猛の意をふるはむとにもあらず、或ひは牡丹の花に遊びて、風流の名をかざらんとにもあらず、本より三界を家として、雨の日風の夜の心をよするのみならん、むかしは伊勢の國にありて、かの草菴の夜の雨に、山田河原のほとゝぎすを聞捨しが、吾妻にさまよひては、葛の松原の跡を尋ね、筑紫にやみては、生の松原の蔭をたのむ、越路は十とせの春秋になれて、そこの獅子菴と人はいふなり、されど都は年々に行かへりて、心にすむべくもおぼえずや、實には水草の流も遠く塵のよしらひならんなや、まして武城のいそがしさ、竹に雀のねぐらも定めざれば、獅子に牡丹の住みかも求め難し、佛もこれを世の火宅なれば心とむなとは、説き玉へど、雪の降夜は寒くこそと、圓住法師はやはらげ玉へり、さはや古里にも一把の獅子菴ありて、人間の是非にわくときは、此世の外の遁所ならん、庭には十五株の松を植ゑて、一琴一鶴の所帶より、世にぬす人のほしがる物も覺えず、行く日は淵明が戸をさゝず、歸るときは陳蕃が箒をとらず、こゝも旅寢の心地ならば、かしこも古鄉の地ならん、されど父母の名殘とて、そなたにおとなしき甥もあれば、こなたにはわけなき姪もありて、正月の鏡に老をいはゝれたるも、節供の物着て見せに來る日も、さながら餘所の國にありて、餘所の子をほむるには似ざらん、それもその親はあの嫁をにくみて、此母はその子の頻ひてなと、聞すて見やりがたき折ふしは、亦たゞ餘所の國にありて、餘所の人をとふには似ざらん、されば一生不住にして、身はやすからぬものとしらば、世はあに心をやるにしかざらん、むかし維摩は方丈のすまゐ

ながら、客のある日は八万の獅子座をおけるよし、そは膳立の數もむつかしからん、我は天下にいくつの獅子菴があり、ある日は客となり、或日は亭主となる、たとへば無數の國土ありて無數の蓮花を生ずれば、無數の佛を見るがごとく、一菴さらに一東花あるべし、こゝにも日野山の長明は、方丈の記に我身を置て、そこを極樂と思ひなせる、いはゞその菴にその長明のみならん、さりとて天をやねと高ぶり、地を板敷とふみなせる、莊老の家のそら言にもあらず、天下に獅子菴の名を定めたるは、實に四所か五所はあるべし。

●論師說

今の俳諧に師なしといふは人、韓愈が師あり師あらずにはあらず、俳諧たゞいひがちにて、師を求むるには及ばずと、さるは五七の俳諧をおぼえて、俳諧の道を知らぬ人なり、そも俳諧の道といふは、遠く世界の理屈をはなれて、近く俳諧の道理にあそぶ、本もより滑稽の家風にして師の弟子に傳ふる一脉なり、されど韓愈が師說は、道に先進の論あれど、我師は弟子に道ををしへて、その道をあとへもどれとなり、今の俳諧師は、かしてきよりしかもかしこきに導きて、弟子はた其師にまされりといへど、我はおろかならんことを敎ふ、更にかしこからんとにはあらず、世に藪醫者の弟子とても、針經をならひ灸穴をおぼえて、二十年にして乘物を見るに、今の俳諧の眼よりは、蓍婆扁鵲か垣の外を見すかし、見宜道三の大根おろしの妙を學ぶ、しかは其師の鵜の眞似より、弟子の鴉もうかるゝなるべし、その醫者はしも學は廣からん、遂に咳氣を直したる沙汰なし、況や大工木挽の弟子も、手斧よ足を切やむ時なし、むかし韓愈が耻の一字も、今論ずれば行過の二字なり、必ず俳諧の行先をたづねそ、我道はたゞかくのごときのみ、さるは野田氏の子に枳邑と云ふ者あり、是に此說のを心傳へて、俳諧の師の求むべく、求むべからずの道理を知らしむ。

●祭猫文小序

（桃李菴曰、此文は四六の法を以て漢字の韻を用ゐたり、是和文に

韻を用ゐし始なり）

李四が草菴に一つの猫ありて、之をいつくしと思ふこと、人の子をそだつるに殊ならず、ことし長月廿日ばかり、隣家の井に迷ひ入て身まかりぬ、其墓を菴のほとりに作りて、釋の自圓とぞ改名しける、彼をまつること人をまつるに殊ならぬは、此度爪牙の罪をまぬがれて、變成男子の人果にいたらむとなり、其文に曰、

秋の蟬の露に忘れては　鳥部山を四時に噪ぎ、
秋の花の霜にはてるも　馬嵬が原の一夜に衰ふ、
きのふは錦繭に千金の娘たりしも　之毛
けふは墨染の一重の尼となれり　連梨

されば　柏木衞門の夢

盧堂和尙の詩

戀にはまよふ　迷　欄干に水ながれて梅花の朧なる夜

貧にはぬすむ　盜　障子に雨そゝひで燈火の幽たる時

鼠は可捕とつくりて褒美に杜工部　作
蛙は無用といましめて異見は白藏司　誡

昔は女三の宮の中　牡丹簾にかゝやきて花まさには　輝　正　速
今は李四が庭の邊　天蓼垣にあれて實すでにおそし　荒　契　已　遲
前生は誰が肱枕にちぎりてか　さらに傾城の身仕舞
後世はかならず音樂にあそばむ　ともに菩薩の物數寄　遊

玉の林の鳥も啼らむ　無
蓮の臺の花も降らし　之

涅槃の鐘の聲冴て　園爐裏の眠たちまちにおどろき　忽　驚
菩提の月の影晴て　卒塔婆の心なにゝかうたがはむ　何　疑
如是畜生

南無阿彌

●東　銘

雙白堂主野紅子夫妻相共好風雅因
有雙白之號東銘指野紅西銘曰其妻

むかし人の繪をかきそめしに、母書は後のことなりとて、此白の一字をうたふと申されける、身に錦繡をまとひ、頭に金冠をいたゞきて、君といひ、臣といひ、男といひ、女といふ、さるは人の見て名けたる名なるべし、しかるに女のをみなへしは、嵯峨野の露のよすがもあるに、男のをみなへしは、いづこの野邊の秋にかあらん、たゞこの雙白堂のあるじとならば、かの商山の翁に頭ならべて、花もおもしろからん、月もおもしろからむ、其銘に曰く、

花鳥にさとればもとのしら髪かな

●宴柳後園序

世に遊ぶ人ありて、綾羅錦繡に樂しぶ時は、樂つきて後樂ぶものなし、山林樹下に遊ぶものは、心に滿たざれば、世に羨む方も出きぬべし、此二つの境に居らざる者を、心に天遊ありとゞむかしの人もいへりける、されば柳後園の何がし、三四の友達ありて遊ぶこと日あらず、額には閑の一字を題して、靜ならぬ時は横にあし、やかましきときはさかさまに置て、その時の心に隨ひゆけば、大小の額見る心にや、侍りけむ、此日東花坊も此中に遊びて、人々酒のまむと催したるに、心に物をとめ、口に餘情をいふ人ならば、罰は金谷の酒もをしからむ、俳諧に案じ入たる時は、こよりといふ物して、くさめさせんとぞたはぶれける。

●箸箱銘并序

簑里にふたりの師あり、其師は茶の湯と俳諧となり、されば茶人の風流は本より山林に情をよせて、市中に閑を求むるときは、世に危からぬ遊ならんに、俳諧は老の白髪をも染めて、酒肆媱房の交りにも疎からず、花鳥の無情に遊ばむことを思ふ、さらば此ふた

つには中庸の掟もあれど、若きときは茶に閑なるべく、老ては花鳥に其情をはなつべし、我聞きぬ、箕里は箸箱に銘して西花門人と書さぬるよし、且は虚にして且は實ならんか、されども今の若からんには明暮の茶の湯に心沈めて、先はそのかたの師をあがむべしと、その箸箱のうちにこの銘をとゞむ。

箱箸のふたりよばれてたまに逢ふ、その師も竹の若からで、我より松の老ぬらむ、酒には寢もし茶にはさめつ、茶には醉ふ人のためしやはある、

しからばその師たふとかるべし。

●博學論

我おもふに學問に損益の二なり、博く學べどもその所以を知らざれば、これを論語よみの論語よまずとはいふなり、爰に或人は、物の表をよくおぼえて、儒佛老莊の書籍より、和漢の詩歌に至るまでも、問ふに答へずといふことなく、鐘のひゞきにしたがふ如くなれど、皆たゞ文字言語のみを覺えて、一字も古人の心をつたへず、しからばその書をあきらめざるにはあらで、唯その所以をしらぬ人といふべし、其經其書は何事にさは說たるや、此詩此歌は何故にかく詠せしやと、經書になづまず、詩歌をとがめず、むかしの詩歌の情を汲まざれば、たゞに物いふ五車韻瑞などいふべし、爰に或人は物の裏を皆しりて、儒書は纔に和論語を覗き、佛經は暫く辻談義をきいて、釋迦の拈華は何故にさは笑ひ玉へる、孔子の乘桴は何事にかく歎き玉へる、老莊の寓言は物の形容あればと、三聖の腸を看破すれば、その釋迦の經あらんには、その孔子の書ならんには、問ふに答へずといふことなく、鐘の響にしたがふが如し、然れば前の或人は、儒書佛經に金銀をつぶして、一字の所以を知らざらんに、後の或人は、手味噌手油にて螢雪のはまれをあげたらんは、捐得のさかひも爰に明ならずや、しかもさはかり博學の人は、詩文歌章の席につらなりて、その故事は何の書に見えたるぞ、その古語は何の經に出たるぞと、後のある人に支配せられて、書物のあるかぎり取ちらし、それは蘭陀寺の經藏に侍り、これは龍宮城の文庫にさふらふぞ、終日に人の日備となりて、我詩我歌の媚はこびぬら

ん、鬼神を感せしむる餘情を知らねば、人間はまして面白がらぬ筈なり、もとより古の詩歌文章は、文字の外の通情なるをや、然ればその人は今世の損のみならず、來世は必ず四國の猿とうまれて、家に用ゆれば人間の諸藝を盡し、野山に置けば何もしら猿なるべし、されど學者の此論を見て、我は諸學に達し諸藝に遊べども、誠にその所以を知らざればと、こゝにおしふる門人だに思はざらんには、遙に世の人はよみて過ぎぬべし、我はかく此論にあそぶも、我を知る人によみきかせて、我を知らぬ人にはいは猿なるべし。

●自造終焉記

今年は寶永辛卯の秋なりけり、東花坊自から終焉の記を作りて、筆を捨て往生す、此日は八月十六日なり、世に容あり名ありてより、名ありて形なき物をば、鬼ともいひ佛ともいへど、さるは繪にかきても見あらんに、容ありて名なき物は、世更につたへても聞かざるべし、むかし遠摩は少林寺に跡をかくして、葱嶺に片足の履を携へ、片岡に一首の歌をよめるが、死してその魂の通へるや、生きてその名のかはれるや、これを佛者の意生身とも、權者の不思議ともいふなるよし、されど隱峯の坐脫立忘をあさむきて、さかさまに立て往生せられしも、生死に自在の過ぎたれば、臨終のあはれもさめたらんに、普化はさながら棺の中よりぬけて、雲に鈴ふり遊べるなどいはゞ、世の人をあやかして法をもてあそぶ輩ならん、さりとて笙歌の雲に聞え、香華の雪とちりぬらん世々に、往生の名を傳へたるも、滅後に人のもてはやして、生前に一字のほまれを聞かぬは、さはいへ聖賢もはいなからんに、よくもあしくも此世ながらの岩のはざまにかくれ居て、水の性の我をやとも聞くらん時は慰みぬべし、さてやはもろこしの范蠡も功名の間に時をむけて、西施と五湖にあそべるか、名は九たびかはれるよし、周に老聃といふべければ、魯に孔丘ともいふべきにや、但しは西施が色にめでて、老の似げなきさまならんにも、范蠡の二字は古今に輝きて、好色のをのことといふ沙汰も聞えず、然らば人には終るところありて、名は善惡の鑑となることを知るべし、さるをや我朝の人はやはら

げて、よそぢに足らで死なんをといへるは、心の花のちりかてに、世はたゞ色のかぎりをぞいふなる、そも〳〵東花坊は芭蕉の門に入て、俳諧にその理屈なきことをしりて、俳諧に此道理あることを知らざりしに、葛の葉の句評に阿翁の論を聞得て、俳諧はかく理屈あし、物に不盡の情をとゞ知れる、さるは元祿の始なれば、年又廿四五なるべし、東は松島象潟より、蝦夷が千島に波のよるべをたづね、西は松浦箱崎より唐ふねの便あらばと思ふ、まして三越路は雁の行返りて、南は住吉の春をしも、和歌の浦波に風骨を洗ふに、身は花鳥の風情ある中にあそび、心は雲水の行衛なき方を樂しみて、終に吉野山の一句に口を閉ぢたるか、其年は寶永の庚寅にして、齡は老の四十六なり、されば先翁は俳諧の姿をしりて、始めて和歌の情をはぢきながら、百世のひかりを方寸につゝみて、終に俳諧をもて人に説かざるに、我は一理に萬理をくだきて、風姿風情の二論より、新古の差別をあかしたるは、師に經ありて經に論あるがごとき、其論は自他の好惡をあばきて、其世の宗匠にも口を開き、その頃の學者をも咬破せる、是れたゞ弟子の

名にくるしめる所にして、且は師の光をかゝぐるの時あらん、阿翁はやく無爲の樂にかへり、弟子はなほ有爲の名にほこるも、物には先後の序ありて、古今に道の然らしむる故なるをや、然るに去年の春三月十二日か、洛の雙林寺に假名の碑を立て、阿翁の遠忌をとひはてなるを思へば、爰に功名の二字も我身まさにおふせたらん、今は終焉の一大事をこそと、故國の黄山に跡をくらまし、門人白狂が爲めに六一經を説きて、滅後の變化をもさとして、後は東西の書音に風雅の交りをたちて、支考の二字をけづれるより、東華坊もなく西華坊もなく、獅子菴もなく野盤子もなく、俳諧はよけれとのほまれもなく、隱者には似合ずのそしりもなし、さらば是もなく非もなきには、風姿もあらず風情もあらぬに、萩の下枝の色やなからん、萩の上葉の音やあからん、いざよひの影のほの〴〵と、今霄の月ぞ此世の見はてなりける。

●前應山賦

七月十日、けふは二萬五千日の功德とかや、殊に女心の賴をせる物詣の日なるべし、此

津の遊女どもの人も見、人にも見られむと、よそはひたちたるに、ゆき〳〵の追風に心ときめきせられて、花す〳〵きのおびきあいたる野邊は、男山もあだにたてりと見ゆらむかし、さるは浮草の世にうかれて、身をあだなりと見る人は、浦の見る目もいかにあだならむ、今さし當りたる物思ひはなけれど、左右の翠簾ごしにのぞかれて、顔のおき所なからんこそうたておもはるれ、禿といふもの〳〵何心なくて、茶漬くひたしと思へる雀の花見顔にもたとへ侍らむ、をひさきいかなるあだ人にか馴て物思ふこともならひてむと、これさへあはれにねぼえられける。

草花の名に旅ねせむ禿ども

●示秋之坊辭

あら秋之坊や、紅葉の秋の世の秋が、又たゞ秋の坊なるか、見ればいとにくさげに、見ねば又なつかし、好惡は人の心にありて、彼は一物もなきものなり、むかし湖南の幻住菴に一夜の夢をむすびしが、其夜もしらず、よみしやすらん惡みしやすらん、無常迅速の一句を與へて、先師も麓までは送り申されしか、今この草菴に、同じ心にすね合ひたる法師の相住て侍るが、物いはぬ日のひねもすも侍りて、かく住みけるこそあやしくたふとけれ、我又こゝに來りて遊ばゝ、何某が三すねといふ歌よみにやならんと、そこの人々もわらひけるなり、秋之坊が云く、俳諧はさることならんか、曰、さだむべからず、俳諧にくはしからんとせば、世情におちて心の花にうつろひぬべし、花なきは又世の風流なし、世にはたゞするすみならんこそ、法師達におきてはさることおれ、たゞ俳諧には遊ぶべし、俳諧に惑ふべからず、強て精しからんとせば、東花坊がごとき世情のうき名とりてむ、俳諧のくるしさ、誠にしかのみならんや。

瓜ふたつ三つにわる手や塵功記

●百鳥譜

鶴は仙家のものなり、たれがみさをは人に近からず、昔し陶淵明に遠塵の風骨ありといへるものは、鶴に淵明が風流あることを知らず、されば野草の花のあきらかに開きぬる

とき、柴門の月かあらたにすめる夜ならむ、此ものひとりは見まく思ふおり、然るを鳶の無能にして、衣裳もおろそかに侍るは、まして風雨にも厭はじとならん、かの莊周が夢に胡蝶とあそべる、是れもむつかしとやは思ふ。

雉子のなく聲はいとかしこきに、百矢の數をのがれずやあらんといはれて、一朝にたまの命を落しぬるは、是も韓信が輩の文武をつくさゞるものなるべし。

蒼鷹の人を見こなして眼の中にあらゝかなる才智をそなへたる、いとにくし、されど一藝に名あるものは、世の人うれをゆるしもつべし。

かの斥鷃が蓬生の宿は、膝を容るゝに過ぎねば、大鵬の雲の萬里をうらやまず、さらばおのれを樂むのみにして、必ずうらやむ方にもあらず、かの鳳凰といふ鳥は、いかなる鳥にかあらむ。

稻負鳥呼子鳥とかやはく鳥は春に住むなるよし、なかぬ物にやしらず、椋と樫との二鳥は其實をはめる時の名なるべし、然るを鶉と云ふ鳥の、花におきふしたらむ、いと心得ぬ。

木々の花の咲こぼれて、明ぼのゝ雪にもまがへる時は、駒鳥の聲のみひやゝかにしていとよし、さればこの鳥の名は、聲のたぐひをいへるならむ、おのれがかたちを名になせるものは、目白頬白のたぐひなるに、鵠は殊におかし、年々菊をいたゞきける自然の理はあまたねど、ことしはめづらしう、梅花をもかざせよかし。

雲雀は小春の空をよくおぼえて、鳥羽の田づらなどにふと啼出たるに、かひつけて囀る鳥もなければ、あはれさびしき物かなと思ふときもあるなり。

三光は啼くときに日月星と云ふなるよし、むつかしとも思はぬや、佛法僧と啼くとりあり、高野の奥にのみ住むなるよし、これを三寶とこそいはめ、然るに鶯の法華經と唱ふる、さるは世さらに老めきたる業なり、提壺の美酒を買ひ、布穀の袴をぬげよといふは、皆おのれが故ならねど、世の人の然らしむるものなるか、蜀魄の不如歸とぬかるは、極めて托物の聲ならんのみ。

秋の雁の江天におくれ、時鳥の曉の雲にさけぶ、いづれにか定め待らん、かりはあはれに、ほとゝぎすはかなし。

鸚鵡は、恩を忘れぬよし、此國にはまれ〳〵なればよ知らず、むかし蔡君は鸚鵡しも、翠琵が身まかりし跡の名を呼つたへしに、心をいたましむる瘴江のほとり、おなじく遊べども同じくかへらずといへる、配所の詩ならばさもあるべし、我國の鳥も物は得言はずして、万里の別を慕ひ行けるとかや、是さへおもひかけぬことなるべし。

燕もゆかりは忘れぬ鳥なり、終日にひるがへり終日にさへづりて、餌には必ず身をつくさずや、いはゞ江湖の僧の、一夜二夜にちぎり捨て、身を雲水にまかせたるが、年を經て後は見知らぬ人も多かる、されば行脚の身の、人にも送られおのれも送りたらんに、涙のこぼるゝはいかなる時にかあらん、かの法師の宿かし鳥とよみつゞけぬより、孤村に出で夕陽を啼きつくせば、誰が家には今霄もおくらんと、あぢさなきことも思はるゝなり。

鷓鴣とは名のかしこきものなり、青草の暮の雨には遊子の魂をおどろかし、黄陵の曉の雲には、旅人の涙をもよほす、すべて夜啼くものはかなしきに、水鷄は隱逸の風情をえたり。

星月夜のおぼつかなき比に、磯の千鳥のあつまりゐて啼くは、心もきゆべくてかなし、たゞ人の別墅なる所に、水の湛えもいと淺くて、常は來馴れて遊ぶらん、戸などかいやりたる音におどろきて、忽ち二三聲のすみゆくは、そのあとも遙に見送られて、河風さむしとおもひ出たるは、待たるゝ人もなくて何にかはせむ。

鳴はましてたつときのあはれなるに、馬糞といふ鷹の風にひるがへりたるなまうかひにていとにくし。かの澤の夕暮は、江山の風情をそなへたれば、もろこしの雲夢ときこえし澤は、いかなる澤にかあらむ。

白鷗は人をさけておのれ靜かなるものなり、然るを諫鼓鳥のおのれ啼て人をさびしがらせむとす、なべて卯の花の曇はいとねふけなるに、夕日の影も木の間にちり殘りて、山

にはおもひかけぬ鳩もなくなり、啼くところのさだかに知れねば是もいとさびし、此もの は偏に雨の日をかなしめるとかや、百花のふかさところならば、終日ぬるともいとはさらまし。

梟の晝出で迷ひありきぬるいとおかし、必ず笑はれじとはたらきたる顔にもあらず、さるたぐひの老僧にや、ひかしも市中にあそびゐけるなり。

深草に住むなる鶉は、その聲すみやかにして世を憚らず、山にもちかく水にも遠からず、粟の穂の靜かるときは、こゝにも出て遊ぶなるべし。

啄木鳥の飢を忍びかねて、木にそひ梢をたゝきあるきて、終日靜ならぬこそ、はかなきわざなれ、限なき生涯のいとあみとならば、誰も〳〵あさましきこと多かるべし、されば空山の日影に雹たばしりて、楢も柏はちり〳〵に吹かれゆく比は、この鳥の聲の更に幽にして、いざや張道士が家をとぶらふ人にも似たれ。

木がらしの夜一夜吹きあかして、しのゝめには吹かずあり ぬるを、さし出る朝日の、殊に珍らしうさし籠めたる障子のかぎりは、もゆるばかり長閑なるに、物の影のさと過ぎてまたゝきもあえぬは、いかなる鳥にか侍らんと、いつも〳〵思はるゝなり、蓋し爲なぞのゆるやかに舞ひありくも、隙を過ぐるはぞなればあはたゞしきか。

軒の雀の晴をよろこびて、何やら殊の外にさへづる、是は亦人にもたとへ侍らん、鷄は碁僧の風情にして、人の隙をうかゞひありくものなり、家鴨も同じ家にありて、おのれが身を惜しとも思はずや、たゞに淤泥のけがれをも厭はずして、これを世の外に出て物にもかゝはらぬと思ふは、さばかり悟りたがへたることは、世の人の上にもあるかし、そなへおきたる翅も、いつかは青雲の志にあへらむ、誠にあはれむべし。

世に人を葬るものありて、常は顔なぞ見合すべきにもあらねど、なすべきわざあれば、よんで酒のませ價をもやりつ、然るに鵜といふものは、詮なき鳥なるべし、早川に魚なぞかづきあげたる、おのれならずとも網して待つべし、さるものならばわきまへぬこともあるべきに、人の手にかはれて、追はみさる魚をも白地に吐かせて、ろれをめでたし

とさゝめかし、笹の葉うちさせて贈りもれくられもする人は、鳥よりは一しほも劣り侍らんか、鷹は羽の下に鳥を組敷きて、譽を人にも見られむと思ふは、せめて名のためにもなさばおりぬべし、さらばこの二つのものを我友となさば、打おきたる心のいとまもなからむ。

鵰はたちゐにつれおくて、へつらはぬものなり、子など持たらばいかにかあらん。

鶯の風情はいとおまめかし、何がしの中將がわづかに人を思ひそめて、雨にもそぼち露にもしほたれて、常の心もさだかならねど、色には出でじ〳〵とこそ忍ぶなりけり、されど田面にうかれ出で田螺ふみまよふ比は、まさしくさる物のたとへとも覺えずなり。

楚臺の夢は一夜の枕におどろき、驪山の契は万里の雲を隔つ、朝の嵐に錦帳を動かせば、李夫人が影もふたゝびは薫ることおし、然らば翡翠といふ鳥は、いかなる美人の魂にかあらむ、杜子美が衣桁に啼くといへるも、此鳥ならで外はあらじ、名にめでゝ之を我友となさば、はしなき人にやあやしまれむ、名をきくより其姿の思はるゝ鶯の中は更なり、瑠璃と云ふ名は、世の人のきくをもかざれるか。

鶯の聲は滑にして、殊に住所もいやしからねば、これも美少年のたぐひにはあらめど、風情やゝおだやかならず、まして世ならぬはいぎたなしともいへりけり。

鳶烏の世をさみたる中にも、烏ばかり嘴のいやしきものはあらじ、夕には寐まどひ、朝にはやく起きて、前栽の木の實おどにつきては、えおもひ捨てずや、いかなる時にか息などもまつるやうに啼いて、いとゞにくさげにはべるなり、それをも神のつかひのみならば、かゝる事いひもせまじ。

およそ烏の嘴のたいらぎたるものは、死水のあなを啜り、とがりて長きものは魚を探り侍る、五穀をはめる烏のまどかにして細やかおらぬは、誠にうなはりたることなるべし、嘴のさきのかいまがりたるは、おのれが友をやぶるべきたくみにや、いとおそろし。

鳥にして鳥の名にあらざるものは、鷓鴣の一名を泥滑々といひ、倭國にも行々子といふ

鳥ありて、聲は少し濁りたるやうに侍れど、啼くときはやゝ涼し、かの明々といふ鳥は、かしら二つにてはめるよし、むかへて我友となさば、米櫃の底をやはらはれむかし。

世を便々といふ鳥ありて、春秋のさかひをしらず、遊ぶ所又常なし、然れども巣つくろふ鳥の、明けて忘れ暮ては悲める類にもあらず、たま〳〵啼く聲はありながら、公冶長が輩ならば知るものなし、誠に知るものならましかば、世にありて是も又詮なし、其かたちにたぐへたる隆鼻鳥は、常に人の惡をたゞし、迦陵頻は、聲の美におぼれたれは我はしらず、かの蝙蝠といふものにしたがはむか。

朧夜を白酒うりの名殘かな
その親をしりぬ其子は秋の風
餅喰はぬ旅人はなし桃の花
牛呵る聲に鳴立つ夕べかな

鳥の音も絶えず家陰の赤椿
春風や障子の日影燃ながら
逢坂も粟津もはては秋の草
月影の雪もちらつく雲の色

春雨や枕くつるゝうたい本
里の子が燕にぎる早苗かな
鶯のきもつぶしたる餘寒かな
馬の耳つぼめてさむし梨の花
是までか〳〵とて春の雪
西行もひすめもちてや衣がへ
松の葉につゝむ心を蓮のめし
水すみて籾の芽あをし苗代田
かなしかる秋をめてたふ菊の花
物思ひ〳〵おく鶉かな
我笠や田植のかさにまじりゆく
しかられて次の間へたつ寒さ哉
椽に寐る情や梅に小豆粥
梅か香の筋にたちよる初日かな
かけにして降出されけり花の雨
霜月の霜のひかりや月と花
二子も鞋を出すやけふの雪
待雪はまたいそがしき月見哉
夕顔の汁は秋しる夜寒かな
杉のみの雪おぼろあり夜の鶴
竹の子や何所でかぬけて繩ばかり
花の咲く木はいそがしき二月哉
蓮の葉に小便すればお舍利哉
牛になる合點ぢや朝寐夕すゞみ

菊の外更に花なし後の月
あの聲の鉦木は細し寒念佛
時鳥啼かぬ夜白し朝熊山
煮木綿の雫に寒し菊の花
野は枯れてのばすものなき鶴の首
腸に秋のしみたる熟柿かな
恵心寺に奉公はせで網代守
歌書よりも軍書にかなし吉野山
俳諧師見かけてなくや閑子鳥
灌佛やめでたい事に寺參り
參宮の笠着て出たる田植かな
立掛る清水や岩に百合の花

飛鳥のはねもこがるゝ紅葉哉
卯の花に扣ありくやかつらかけ
涼しさや椽より足をぶらさげる
虻の目のなにかさとりて早合點
雁の聲おぼろ〳〵と何二里
葉もとげも心には似ぬあざみかな
瓜ふたつ三つに割る手や塵却記
幾ほどの世にきれいなり芥子の花
笹の葉は何と寢たるろ蝸牛
宇治に似て山なつかしき新茶哉
琴の音にいそげば百合の月夜哉
夏山や雲井に細る鷹のかけ

欠

○谷口蕪村

名は長庚字は春星、三東成と號す、畫に巧にして其の名殊に高し、天明六年歿す。

●桃李集序

いつの程にかありけん、四時四まきの歌仙、春秋はうせぬ、夏冬はのこりぬ、一人請ふて本にゐらんと云ふ、一人とゞめて曰く、この歌仙ありてや、年月を經たり、おそらくは流行におくれたらん、予笑ふて曰く、俳諧の活達なるや、實に流行ありて流行なし、たとへば一圓郭にそうて人を追ふて走るがごとし、先んずるものやがて後れたるものを追ふに似たり、流行の先後何を以て分つべけむや、只日々におのれが胸懷をうつし出して、けふはけふの俳諧にして、翌日はまた明日の俳諧なり、題してもゝすもゝといへり、めぐりよめどもはへなし、これこの、集の大意なり。

はありとぶ富士の裾野の小池より

年守や乾鮭の太刀鱈の棒

欠

藪入の夢やあづきのにゆるうち
酢桶をこれへと樹下に床几かな
道のべの刈藻花さく宵の雨
烏帽子着て誰やらわたる春の水
春花に舞はで歸るさ憎し白拍子
吹殼の浮葉に煙る蓮見かな
鶯の鳴くやちいさき口あけて
拾ひのこす田螺に月の夕べかな
名月や雨をためたる池の上
昨日去り今日去り雁のなき夜かな
連歌して戻る夜鳥羽の蛙かな
錦木は吹倒されて雞頭花

三椀の雜煮かかるや長者振
浮草のさそひ合せてれごりかな
七草や袴の紐のかたむすび
菜の花や月はひがしに日はにしに
心太さかしまに銀河三千丈
順禮の目鼻書ゆくふくべ哉
饅の面世上の人をにくむかな
大津繪に蒙こぼしゆく乙鳥かな
春雨やけんなんとして今日はあり
日はなゝめ關屋の槍にとんぼ哉
行春や撰者をかこむ歌の主
菜の花や鯨もよらず海くれぬ

春の海ひねもすのたり〳〵かな
渡り鳥こゝを瀬にせむ寺ばやし
木枯や何に世わたる家五軒
つり鐘にとまりて眠る胡蝶哉
窓の灯の梢にのこる若葉かな
風雲のよすから月の千鳥哉
これき李に小道つきたり芹の中
關の戸の火鉢すくなき餘寒かな
畑打や我家も見えて暮かゝる
夜もすがら音なき雨や種俵
梨の花月に文よむ女の李
短夜や小見世明たる町はづれ
鯨うり市に刀をならしけり
衰へや小枝にすてぬ年木こり
春の水山なき國を流れけり
草霞水に聲なき夕べかな
炭賣に鏡見せたる女かな
味氣なき蚊蝿の裾ふむ魂まつり
御忌の鐘時なき京のうねり哉
陽炎や簀に土をつめる人
折釘に烏帽子かけたり春の宵
箱を出て顔わすれめや雛二對
山もとに米ふむ音やふぢの花
茨の花古鄕の道に似たるかな

蝙蝠や問ひの女房こちを見る
日をもつて數ふる筆の夏書哉
稻妻にこぼるゝ音や竹の露
桔梗も見ゆる花屋の持佛堂
むだ花にかゝる恥なし種ふくべ
山かげや誰呼子鳥引板の音
菴の月あるじを問へば芋畑に
鷄頭の根にむつまじき箒かな
渡りどり雪のはたての錦かな
稚子の寺なつかしむ銀杏かな
初冬や日和になりし京はつれ
爐開きや雪中菴のあられ酒

練供養祭り顔なる小家かな
水の粉のきのふに盡きぬ草の菴
日頃中よくて恥ある相撲かな
山は暮て野は黃昏の芒かな
折あしく門こそ叩け鹿の聲
攝待に煙管わすれて西へゆく
初汐におはれてのぼる小魚哉
折吳るゝこゝろこはさじ梅嫌
泊り氣て一人來ませり十三夜
小春なぎ眞帆も七合五勺かな
初時雨眉に烏帽子の雫かな
皿をふむ鼠の音の寒さかな
埋火やつひには煮える鍋の物
古寺の藤淺間しき落葉かな
咲くべくも思はであるをつはの花
紙襖折目たゞしく哀れなり
寒聲や古歌うたふ誰が子ぞ
寒月や枯木の中の竹三竿

旅日記の內

相撲

雨ぼろ〳〵曾我中村の田植かな

同

甘酒の地獄もちかし箱根山

武藏

裾にゐて心に遠き火桶かな
柴刈の鬢にさはるや枯尾花
眞結びの足袋はしたなき給仕哉
御火燒や霜うつくしき京の町
冬の日や菰着て在すかげ法師
斧いれて香に驚くや冬木立

稻妻や八丈かけてきくたより

信濃

歸る雁田毎の月の曇る夜に

陸奥

暖簾に東風吹く笹の出店かな

同

松島の月見ぬ人やうつせ貝

奥

村紅葉會津商人なつかしき

出羽

新米の坂田ははやし最上川

山城

白梅や北野の茶店に角力取

同

鶯の日枝を後ろに高根かな

同

近道へ出て嬉し野のつゝじかな

大和

錠買て入るやの吉野山さくら

同

三輪の田に頭巾着て居る案山子哉

近江

高麗舟の寄らで過ゆく霞かな

同

椎捨ふ横川の兒のいとけなさ

摂磨

朝露や室の揚屋の納豆汁

摂津

源八を渡りて梅のあるじかな

同

筋違に布團しきけり宵の春

丹波

龜山へ通ふ大工や雉子の聲

河内

狐火はいづこ河内の麥はたけ

紀伊

玉川に高野の花やながれ去

同

隱れすむ花に眞田の謠かな

若狹

夏山や通ひ馴れたる若狹人

尾張

殿原の名古屋顔なる鵜川哉

同

大寺に君しろしめせ今年來る

伊勢

稻妻の一網打つや伊勢の海

駿河

富士一つ埋め殘して若葉かな

甲斐

甲斐が根や穗蓼の上を塩車

飛驒

飛驒山の貧屋戸さしめ夜半の冬

○立北枝

北枝は加賀小松の産にして金澤に住し、研刀を以て前田家に仕ふ、通稱三郎ゲ衛門、別號を畢雲又超子と云ふ、享保三年五月歿す、金澤心蓮舍に葬る。

大空も見えず若葉の奥ふかし
傘のいくつ過ゆく雪かくれ
有明やひかりおさまる桃の花
笠すてゝ塚をめぐるや夕時雨
しくれ年は又松風のたゞおかず
來秋は風ばかりではなかりけり
田の水を見せて螢のさかり哉
うかひ火や魚の心も夏のむし
鶯やつたふておかる梅の花

立去つて眉毛に秋の峰寒し

百八十八

追上て尾上にきかん鹿の聲
蝙蝠に手もともくらし油うり
池の星またはら〳〵と時雨かな
やけにけりされども花はちりすまし
朱の鞍や佐野へわたりの雪の駒
竹賣て酒にかへはや露しぐれ
寵馬かはへ飛つく袋かな
山吹やてぼれし泥に上かはき
魂まつり甥がねたらば茶の通ひ

みじか夜やそれ人間のあうぶとき
田を賣ていとゞ寢られぬ蛙かな
さい槌の祝儀にならす水鷄哉
乳を出して船こぐ蜑やあしの花
夕風になに吹あげて朧月
夏酒やわれと乘こむ火の車
聊もせず我なり秋とおごりけり
帆柱のならふや霧のむかひ島
齒固に杖のへるころめでたけれ
水呑に下りる雲雀や蘆の中

元日や疊の上に米だわら
初霜や麥まく土のうら表
うち入て先あらそふなり池の鴨
山川で心はやるな花の雲
むしぼしや幕をふるへば櫻花
柿の袈裟ゆすり直すや花の中
白露とまたあらみの〻行衛かな
うぐひすも笠着てのぼれ小屋の屋根
七草や唱歌ふくめる口の中

○小西來山

來山は和泉堺の人なり、長じて大坂に出で今宮に住す、十萬堂又洒々齋の別號あり、常に女人形を愛して座右を離さず、遂に之が記を作れり、享保元年十月三日歿す、年六十三。

●女人形記

西行法師に、銀猫を賜ひけるに、門人の童子に打くれて通りしとかや、いはゞこうあらめ、我は道にて、やさ物の人形にあひ、懐にして家にかへり、晝は机下にすゑて眼によろこび、夜は枕上にやすませて、寢覺の伽とす、世を見れば、繪本の達磨などを崇めて科もなき身を白眼つめけるよりは、遥にましてんや、物いはずわらはぬかはりには、腹たてず悋氣もせず、蚤蚊のいたみを覺えねば、いつまでも居住居をくづさず、留守に待つらんとの心づかいなし、酒をのまぬは心うけれど、淋しげに物くはぬはよし、しろきものぬらぬば、はげることなし、四時同じ衣裳なれども、暑寒を知らねば、此方氣のかはることと更になし、夏はむかふにすゞしく、撫るに心よく、冬は爐のもとをゆるさねば、よいかげんにあたゝかなり、女の石にかたまりしを思へば、石が女に化するじさものにもあらず、千歳を經とも變ずまじきかたち、風老がなからむあとの若後家、さりとも氣づかひなし、男はいづこの陶工ぞや、出所をしらず、あゝうつゝなのいも せ物がたりなり。

折ることも高根の花や見たばかり

見かへれば寒し日暮の山櫻
朝顔に置とは露のつよみ哉
我春は宵にしまふてのけにけり
兩方に髭があるなり猫の戀
今宮は虫どころなり聾なり
花さいて死ともないが病かな
竹の子を竹になれとて竹の垣
凉しさに四つ橋を四つ渡りけり
春の野や長きかつらの裾につく
元日やされば野川の水の音

春の夢氣のちがはぬがうらめしい
手も出さで物になひゆく枯野哉
蚊ふすべの中に聲あり念佛講
時雨はだなで起うて橋ふたつ
初夜と四つあらそふ秋となりにけり
重たくと雪つけて來よ若菜賣
夏川や草で足ふく時もあり
春雨や火燵の外へ足を出し
我ねたを首あげて見る寒さ哉
三味線も小唄ものらず梅の花

出すとよいいとかけや人を驚かす
盗人の銭なく雪のやぶり哉
梅の花名によびよくて匂ひかな
春を持つて堀おこさるゝ芽うど哉
唐辛子茄子の朱にうばはれず
雨戸こす秋の姿や燈の狂ひ
郭公ぬれて帷子一つなり
招くたび人になしたき芒哉
楊貴妃や足袋までぬがす大皷持

○池西言水

名は則好、通稱八郎兵衛、紫藤軒又は風下堂と號す、奈良の人なり、世呼んで木枯の言水と云ふ、慶安三年に生に、享保七年九月二十四日歿す、享年七十三。

火の影や人にてすごき網代守
干網に入日みちつゝしぐれつゝ
何の木と問ふまでもなし歸り花
飯蛸の可愛やあれて果るけな
早乙女やよごれぬものは歌ばかり
松のある枝に掛けたりはづしたり
むしつてはむしつては捨つ春の草
せめてさて人の氣にあへ忘れ草
中々に巨燵か明て寒さかな
氣にむかぬ時もあるらん節季候
木枯の果はありけり海の音
日枝たかく吹かへさるゝ野分哉
山寺の峰より高き燈籠かな
ほとゝぎす櫻は杣に伐られけり
朝湯から傾城にほふ菖蒲哉
山萩の添竹はなしさりながら
尼寺や唯菜の花のちるこみち
六月の蜜柑見せけり氷室守
犬ほえて家に人なし蔦もみぢ
ふけ〳〵と鞠垣すこしけふの月
浮れ出て扇子しめけり星月夜
見に來たる人かしましや須磨の秋
つりそめて蚊屋面白き月夜哉
猫にげて梅動きけりおぼろ月
あふひ草かゝれとてしも牛の角
藥玉やともしびの火のゆらぐまで
一しきり蠅も出けり歸り花
人魂はきえて梢の燈籠かな
文持つてかこち附けり闌の船
身を思へばいなするかやの螢かな
鶯に口きかせけり梅の花
涅槃會やさながら赤き日の光
年玉に梅折る小野の翁かな
早乙女の見に行く宮の鏡かな
菜の花や淀もかつらも忘れ水